松江市文化財調査報告書第55集

文化財愛護
シンボルマーク

矢田平所遺跡発掘調査報告書

1993年3月

松江市教育委員会

例　　言

1．本書は，平成４年度において松江市教育委員会が実施した矢田平所遺跡発掘調査にかかる報告書である。

2．発掘調査は，有限会社大生商事からの受託事業として，平成４年10月２日から平成５年２月１日にかけて実施した。

3．調査の組織は下記のとおりである。

委託者	有限会社大生商事	代表取締役	梶谷　英生
受託者	松江市代表者	松江市長	石倉　孝昭
主体者	松江市教育委員会	教 育 長	諏訪　秀富
		生涯学習部長	松尾　光浩
		文化課長	中西　宏次
		文化財係長	岡崎雄二郎
調査者		同　主事	飯塚　康行
			金山　正樹
		同　嘱託員	山尾　絹江

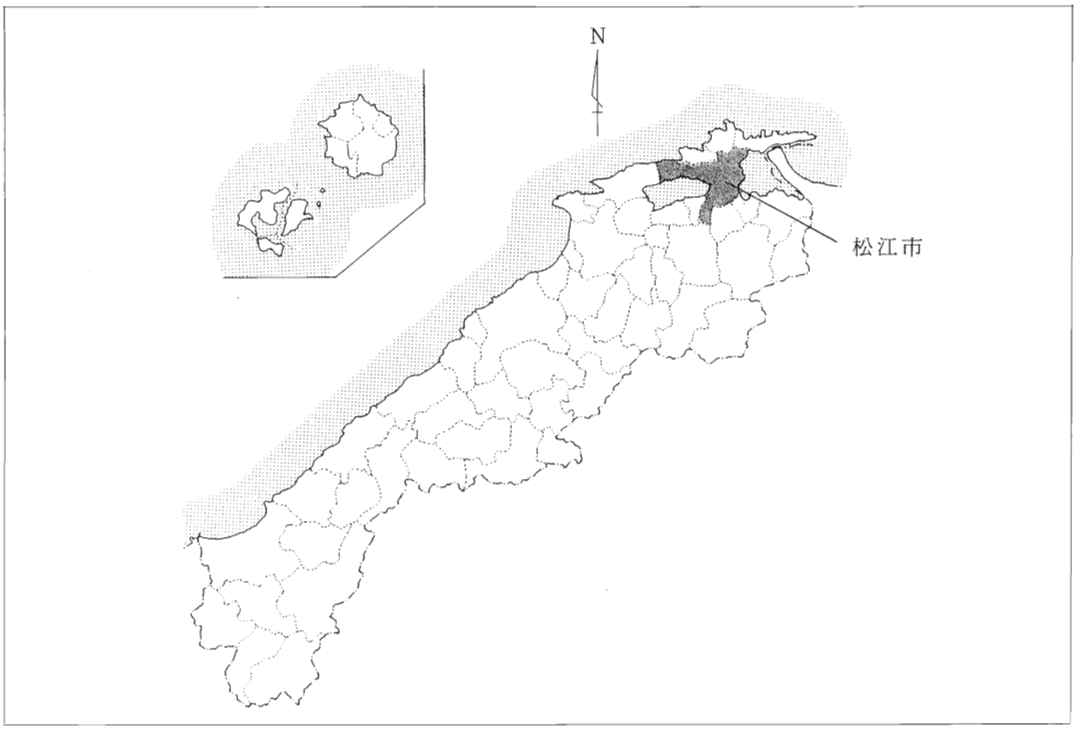
4．調査の実施にあたっては，次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査指導　角田徳幸氏（島根県教育委員会文化課文化財係主事），平野芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主任）

調査協力　梶谷英生（有限会社大生商事代表取締役），杉谷良一（東建設株式会社営業課長）

5．出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

6．本書の編集及び執筆，図面の浄書等は飯塚，金山，山尾がこれを行った。



第1図　位　置　図

第2図　矢田平所遺跡位置図

目　　次

1．調査に至る経緯…… 1

2．周辺の歴史的環境…… 1

3．調査の概要…… 9

(1)　SI － 01 …… 9

(2)　SB － 01 ……10

(3)　SB － 02 ……10

(4)　加工段状遺構……10

(5)　住居跡推定遺構……22

(6)　SK － 01 ……25

(7)　B－4～C－4区ピット群……26

(8)～(12)　T－1～T－5 ……27～29

4．小　　結……32

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱（ときょう）、すなわち斗（ます）と栱（ひじき）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク

1．調査に至る経緯

本区域は，間内越遺跡に隣接した南向きのなだらかな緩斜面である。平成３年度において有限会社大生商事が事務所と倉庫の設置を計画した際，埋蔵文化財分布調査の依頼を受け，平成３年11月11日にこれを実施した。調査の結果，区域内において土師質土器１片を表採し，地形から見て隣接する間内越遺跡に関連する住居跡等の遺跡の存在が推定されたため，平成４年５月12～18日において試掘調査を実施した。調査の結果，区域内に設定した９箇所のトレンチのうち，３箇所のトレンチにおいて柱穴と思われるピット多数と土壙１および遺物包含層を発見し，古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器，土師器，布目瓦等多数を検出したため，同時期の集落跡の遺跡が存在することが明かとなり，「矢田平所遺跡」と命名した。

その後，平成４年度において，発掘調査の依頼を受け，本市教育委員会において計52日を要してこれを実施することとなった。

2．周辺の歴史的環境

矢田平所遺跡は，松江市矢田町字平所に所在する。

当地は，松江市の南東部に展開する意宇川下流平野の北部丘陵地帯にあたり，間内越遺跡（２）に隣接した南向きのなだらかな緩斜面である。本遺跡周辺には，意宇川下流平野および周辺丘陵一帯に縄文時代からの遺跡が密集している。

縄文時代の遺跡としては，才塚遺跡（15），保地遺跡（31），さっぺい遺跡（53），法華寺前遺跡（64），竹矢小学校校庭遺跡（66），的場遺跡（67）があり，土器類が発見されているため，この頃には当地において人々の生活の営みが始まっていたものと考えられる。

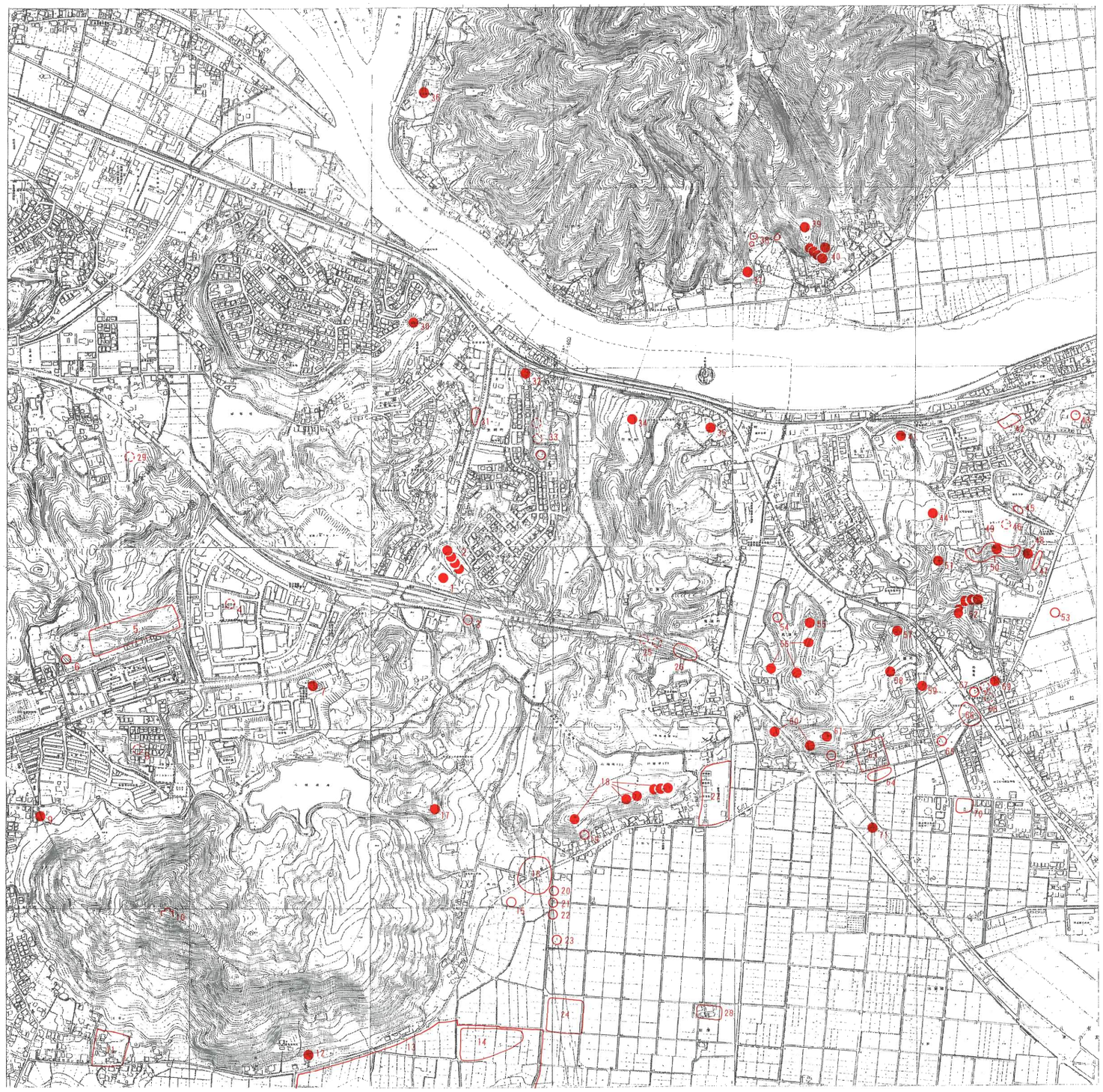
弥生時代に入ると遺跡も多数発見されており，人々の活発な生活ぶりが窺えるが，集落跡として発見されているものは少なく，前期から後期にかけての集落跡として布田遺跡（71）が代表的である他，長峯遺跡（54）から中期末から後期前半にかけての竪穴住居跡１棟が検出されている。また，特筆すべきことは，布田遺跡からは多量の管玉未製品が検出され，玉作集団の存在が推定されることである。また，国道９号線バイパス建設工事に伴う発掘調査で発見された平所遺跡（３）からは水晶，碧玉，赤瑪瑙を使って攻玉を行った工房跡が検出されており，意宇川下流平野では，弥生時代から古墳時代初頭に至るまで玉作りが行われていたことが知られる。

この時期の墳墓としては，的場遺跡（67）の土壙墓や，間内越遺跡（２），来美墳墓（４）に見られる四隅突出型墳丘墓があり，有力な首長クラスの出現とともに遺跡の分布も意宇平野北辺から中央部や南側へ広がる状況が窺える。

古墳時代中期以降になると，茶臼山の西側山麓山代町の台地と，茶臼山の東北側にあたる大橋川沿いの丘陵に次々と大型の古墳が築かれる。石屋古墳（30）（一辺40m，方墳），井ノ奥４号墳（33）（全長57.5m，前方後円墳），手間古墳（34）（全長約70m，前方後円墳），竹矢岩舟古墳（35）（全長約47m，前方後方墳），魚見塚古墳（36）（一辺約70m，前方後円墳）などがそれである。これらのうちで注目すべき点は，方形墳主体の出雲地方東部の古墳文化の中で，方形墳と混在して５世紀後半から６世紀前半にかけて50～70m級の前方後円墳が築かれていることであり，立地として大橋川流域の水運の要衝に位置することから，これらの古墳が大和朝廷の勢力下に出現したものであるとするならば，当地においてこの時代に畿内の政治的，社会的影響の波及があったものと考えられる。

古墳時代後期に入ると，茶臼山山麓西側一帯に横穴式石室をもつ岡田山１号墳，御崎山古墳や，出雲地方に特徴的な石棺式石室を持つ永久宅後古墳（９），山代方墳，岩屋後古墳，古天神古墳が見られ，後期古墳文化の中心となり，有力な豪族の存在が窺われるが，茶臼山北東部では小規模な古墳の造営に留まり，文化の中心は西方へ移ったかのようである。また，家族墓的な性格を持つ横穴墓については，石棺式石室の影響下で安部谷横穴群，十王免横穴群（７），狐谷横穴群（８）に見られるように，平入四注式の整美なものが流行し，中には組合式家形石棺を内蔵するもの，複室構造を持つもの，線刻壁画を有するものなど，生活水準の向上により農耕民層にも有力者がいたことが推定される。これらのことから，この地域が古代豪族にとってかなり重要な位置を占め，その後の出雲地方の中心的位置を獲得する基盤がこの時期に形成されたものと見ることができる。

奈良時代に入ると，平野の北辺に出雲国分寺（27），出雲国分尼寺（63）が建立されており，これらに関連する瓦窯跡も見られる。また，平野南側では，出雲国庁が設けられ，名実ともに出雲地方の政治，文化の中心となっていくのである。



第３図　周辺遺跡分布図

矢田平所遺跡周辺遺跡分布図一覧表

No.	名　　称	所　在　地	種　別	概　　要
1	矢田平所遺跡	松江市矢田町平所	集落跡	竪穴住居跡1、掘立柱建物跡2、土壙、遺物包含層
2	間内越遺跡	〃　〃　〃	墳丘墓	四隅突出型墳丘墓1、不明3
3	平所遺跡	〃　〃　〃	玉作跡	竪穴住居跡(玉作工房跡)4、埴輪窯跡1、溝状遺構1
4	来美墳墓	〃　〃　的場	墳丘墓	四隅突出型墳丘墓1、消滅
5	来美廃寺	〃　〃　来美	寺院跡	礎石、瓦類、須恵器
6	来美遺跡	〃　〃　〃	散布地	
7	十王免横穴群	〃　〃　十王免	横穴群	38穴(27穴残存)、組合式石棺、陰刻壁画、金環、須恵器、土師器
8	狐谷横穴群	〃　山代町狐谷	〃	17穴(消滅)、組合式石棺、陰刻壁画、須恵器、土師器
9	永久宅後古墳	〃　〃	古　墳	石棺式石室
10	茶臼山城跡	〃　〃	城　跡	
11	四王寺跡	〃　〃	寺院跡	瓦、かわらけ
12	大谷横穴群	〃　大草町	横穴群	2穴
13	出雲国府跡	〃　大草町・山代町・竹矢町	官衙跡	建物跡、溝状遺構、瓦、須恵器、土師器、木製品、木簡、銅印
14	樋口玉作跡	〃　山代町	玉作跡	
15	才塚遺跡	〃　竹矢町	散布地	
16	間内遺跡	〃　〃　間内	〃	土師器、須恵器片、打製石斧
17	廻田古墳	〃　矢田町十王免	古　墳	前方後円墳1
18	上竹矢古墳群	〃　竹矢町上竹矢	古墳群	前方後円墳1、前方後方墳1、方墳4
19	上竹矢遺跡	〃　〃　〃	散布地	石斧
20	大平遺跡	〃　矢田町大平	〃	土壙、碧玉剥片
21	上小紋遺跡	〃　竹矢町上小紋	水田跡	木製品
22	向小紋遺跡	〃　〃　向小紋	〃	
23	四配田遺跡	〃　〃	散布地	土師器片
24	神田玉作跡	〃　〃　上竹矢	玉作跡	砥石
25	才ノ峠古墳群	〃　〃　才ノ峠	古墳群	前方後円墳1、方墳1
26	才ノ峠遺跡	〃　〃　〃	集落跡	掘立柱建物跡16、住居跡状遺構、土壙等
27	出雲国分寺跡	〃　〃　寺領	寺院跡	南門、中門、金堂、講堂、僧房を一直線に並べた東大寺式伽藍配置、礎石、瓦
28	方ケ坪遺跡	〃　〃	官衙跡	
29	南家古墳群	〃　東津田町南外	古墳群	前方後方墳(20)、方墳(10x10)(消滅)
30	石屋古墳	〃　〃　石屋	古　墳	方墳(40x40)、須恵器、土師器、形象埴輪、円筒埴輪
31	保地遺跡	〃　矢田町保地	散布地	縄文土器、弥生土器、石鏃
32	荒神畑古墳	〃　竹矢町井ノ奥	古　墳	もと一辺30m前後の方墳か、中期円筒埴輪、滑石製有孔円板
33	井ノ奥古墳群	〃　〃　〃	古墳群	前方後円墳(57.5m)、方墳3
34	手間古墳	〃　〃　手間	古　墳	前方後円墳(70m)、埴輪
35	竹矢岩舟古墳	〃　〃　竹矢	〃	前方後円墳1、舟型石棺、埴輪
36	魚見塚古墳	〃　朝酌町	〃	前方後円墳(70m)
37	明事山古墳	〃　福富町	〃	方墳(10x10)
38	福富神社境内遺跡	〃　〃	散布地	須恵器片
39	阿弥陀寺裏山古墳群	〃　〃阿弥陀寺	古墳群	方墳5基
40	阿弥陀寺古墳	〃　〃　〃	古　墳	石棺式石室
41	瀧山古墳	〃　八幡町瀧山	〃	方墳、土壙、刀子他
42		〃　〃	散布地	古式土師器片
43		〃　〃	〃	須恵器片
44		〃　〃	古　墳	方墳(16x11)
45		〃　〃	散布地	土師器、須恵器片
46	観音寺古墳群	〃　馬潟町観音寺	古墳群	方墳3基(消滅)
47		〃　八幡町	散布地	須恵器片
48		〃　〃	古　墓	五輪塔、宝篋印塔2群8基
49		〃　〃	〃	土壙、平安時代
50		〃　〃	散布地	土師器、須恵器片
51		〃　〃	古　墳	方墳(19.5x15)
52	迎接寺山古墳群	〃　〃	古墳群	前方後円墳(24x11)、方墳(11x9)、方墳3基
53	さっぺい遺跡	〃　〃　山本	散布地	縄文式土器片
54	長峯遺跡	〃　竹矢町中竹矢	住居跡	弥生中期末～後期前半の竪穴住居跡、平安時代土壙墓
55	中竹矢後１号墳	〃　〃　〃	古　墳	方墳(14.2x14.2)、須恵器、瓦
56	武内神社裏山古墳群	〃　〃	古墳群	方墳3基
57	代官家後横穴群	〃　八幡町宮内	横穴群	10穴以上
58	宮内岩舟古墳	〃　〃　〃	古　墳	円墳
59	八幡宮下横穴	〃　〃　〃	横　穴	
60	中竹矢古墳	〃　竹矢町中竹矢	古　墳	前方後方墳
61	社日古墳	〃　〃　〃	〃	円墳
62	出雲国分寺瓦窯跡	〃　〃　井ノ奥	窯　跡	瓦
63	出雲国分尼寺跡	〃　〃　中竹矢	寺院跡	瓦
64	法華寺前遺跡	〃　〃	散布地	縄文式土器片
65	平浜八幡宮前遺跡	〃　八幡町	〃	弥生式土器片
66	竹矢小学校校庭遺跡	〃　竹矢町	〃	縄文式土器、弥生式土器、土師器片
67	的場遺跡	〃　八幡町的場	〃	石匙
68	的場横穴群	〃　〃　〃	横穴群	3穴(消滅)
69	的場古墳群	〃　〃　〃	古墳群	五輪塔
70	宮内遺跡	〃　〃	散布地	
71	布田遺跡	〃　竹矢町	集落跡	弥生時代～中世の旧河道、掘立柱建物跡、銅鐸形土製品、分銅形土製品、管玉未製品、木製品、土器類

0　　500m

第４図　調査前地形測量図

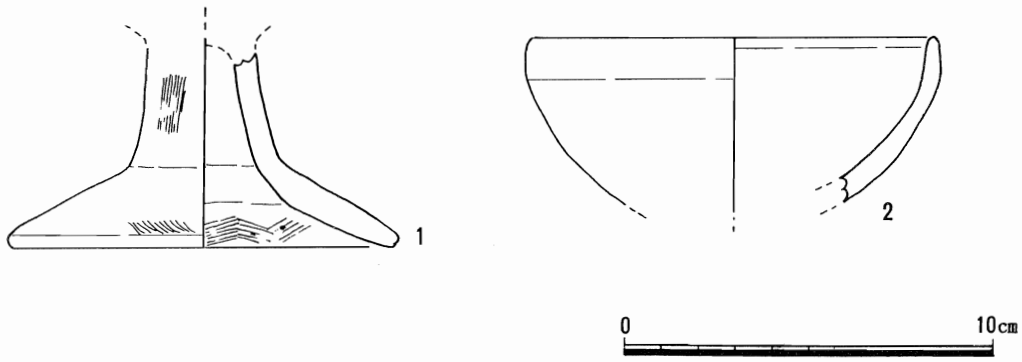
第５図　矢田平所遺跡調査成課図

3．調 査 の 概 要

(1) SI－01

Ａ－１～２区で検出された一辺4.5m，深さ最大25cmを測る方形の竪穴住居跡で，四辺はほぼ東西南北に合わせるが，プラン西側半分は削平により欠損している。

残存する東辺部分と，南辺，北辺の半分に幅12～20cm，深さ５cmの溝が巡る。床面においてピットは８穴検出された。柱穴となりうるものはＰ－２，３，４，６，７であるが，どのピットをもって上屋を構築したかは不明である。Ｐ－１は98×70cm，深さ46.8cmを測る比較的規模の大きいピットであり，ピット中埋土から土師器の細片が数片検出されたが，南東隅に掘り込まれており，柱穴よりもむしろ貯蔵用のピットか工作用のピットの可能性が考えられるものである。Ｐ－５は直径37cm，深さ3.6cmを測るピットであるが，赤褐色の焼土が埋積しており，簡単な炉として使用された可能性がある。Ｐ－１同様土師器の細片が１片検出されているが，火を受けた形跡はなかった。Ｐ－２は68×43cm，深さ27.5cmを測る楕円形のピットで，淡黒褐色の埋土が検出され，柱穴用のピットと考えられるものである。ピット埋土中からは土師器の細片が検出された。床面出土遺物としては，№１の土師器の高坏がある。風化が著しく，脚部のみ残存していたが，形態および手法の特徴から，古墳時代中期のものと考えられ，この土器の時期をもってSI－01の築造時期と考えて差し支えないものと考えられる。



第６図　ＳＩ＝０１出土遺物

(2) SB－01

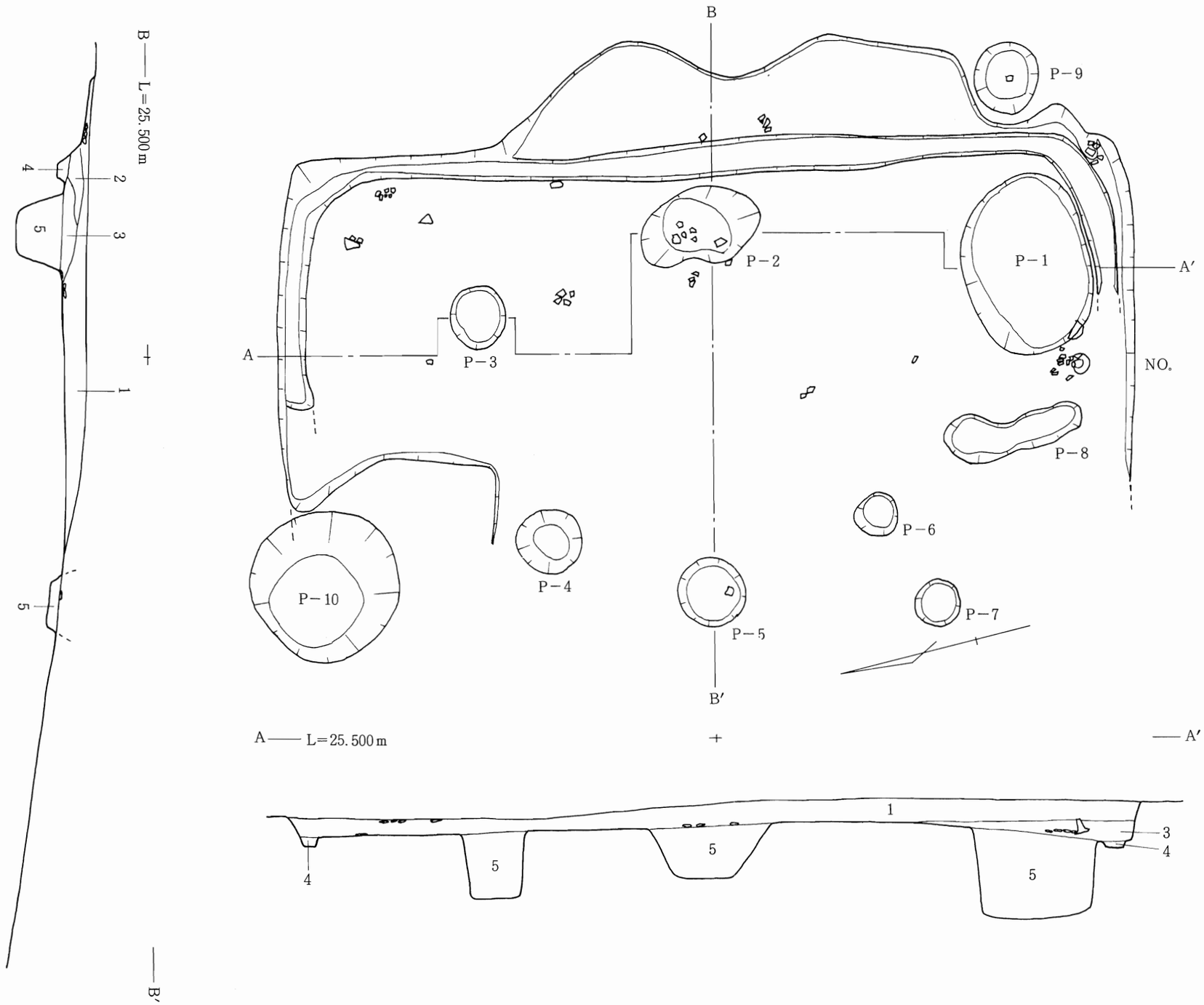
長辺方向3.1m，短辺方向1.45mを測り，長辺方向の主軸をほぼ南北に合わせる２×１間の小規模な掘立柱建物跡である。ピットは径0.8～52cm，深さ12～38cmを測る。Ｐ－１，２の埋土中から土師器の細片が検出されているが，いずれも器形，時期ともに不明確なものである。SB－01の立地を観察すると，長辺方向の主軸は西接するSI－01の東辺方向とほぼ同じ方向であることから，SI－01に関連する付帯施設であると考えられ，建物の規模から倉庫等に利用されたものではないかと考えられる。

(3) SB－02

長辺方向3.1m，短辺方向1.45mを測り，長辺方向の主軸をほぼ南北に合わせる２×１間の小規模な掘立柱建物跡である。ピットは径0.8～52cm，深さ12～38cmを測る。Ｐ－１，２の埋土中から土師器の細片が検出されているが，いずれも器形，時期ともに不明確なものである。SB－02の立地を観察すると，長辺方向の主軸はSB－01とほぼ直交するかたちで，SI－01の南辺と合わせることから，SB－01と同じく，SI－01の付帯施設であり，倉庫等に利用されたものではないかと考えられる。

(4) 加工段状遺構

Ａ－３～Ｄ－３区にかけて本遺跡の斜面裾部分を横断する形で南北に走る加工段状の遺構であり，比高差70～120cmを測る。加工段の下部には平坦面を作り出しており，不整形なピットが多く検出されているが，柱穴として利用されたものとは想定し難く，性格は不明である。また加工段下部には茶褐色の遺物包含層が厚く堆積しており，土器溜り状を呈している。出土遺物は概ね６Ｃ末～８Ｃ代にかけての時期幅のある須恵器，土師器等が混在しており，若干ではあるが古式土師器の混入も見られるが，出土状況を見ると，Ａ－３区において特に７Ｃ後半～７Ｃ末にかかる土器が集中している。器種としては，須恵器は蓋坏類，高坏，壺甕類，土師器は壺甕類，高坏，支脚，かまど，甑，古式土師器は壺甕類等があり，全体として土師器の比率が非常に高く，その中でも支脚，かまどの破片数の多いことが注目され，人間の生活の営みを想像させるものであるが，遺物包含層の堆積状況をみると，自然堆積というよりもむしろ，整地の目的で加工段を人為的に埋め立てた可能性が考えられ，これらの遺物を含む遺構は実際には加工段より上方に存在していたものと推定される。

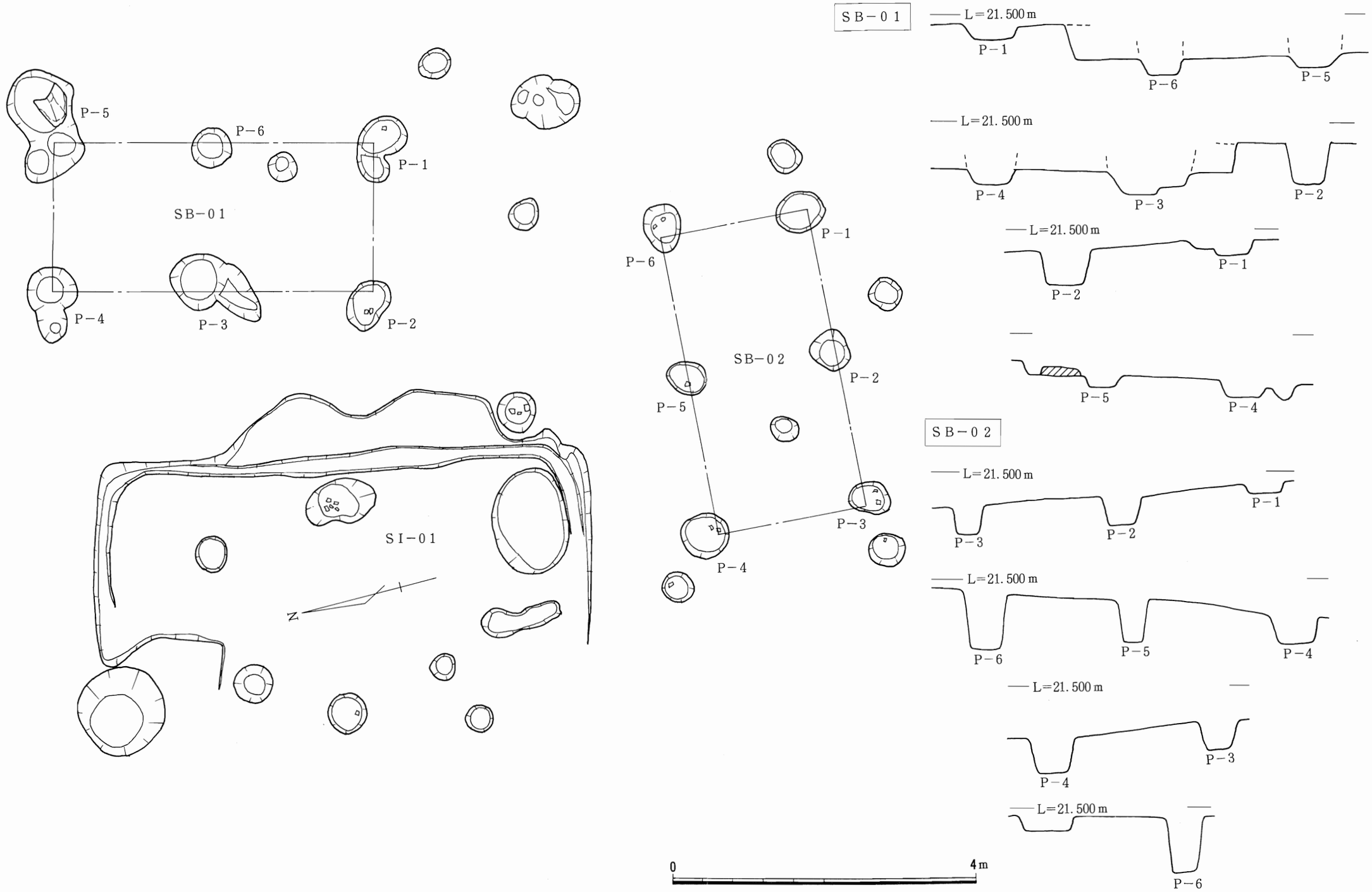


1. 暗褐色
1. 暗茶褐色粘質土
2. 明茶褐色粘質土
3. 茶褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 淡黒褐色土

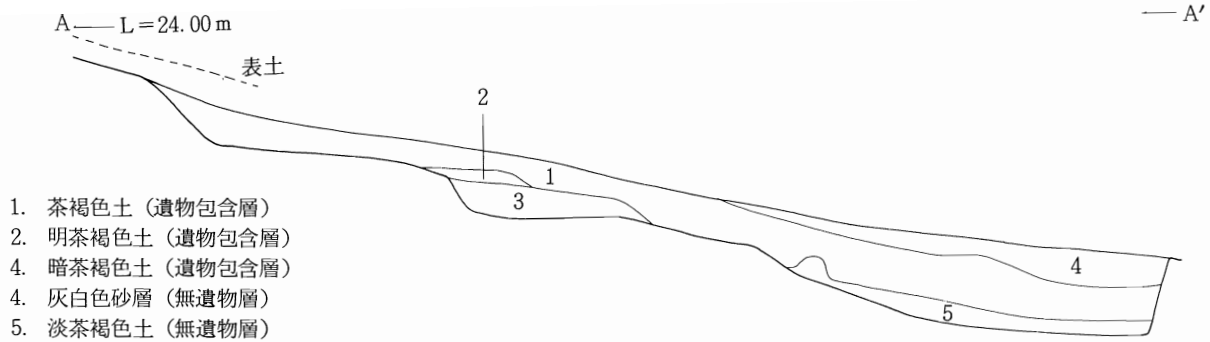
Pit	径	深 さ
P－1	98 × 70 cm	46.8 cm
P－2	68 × 43 cm	27.5 cm
P－3	35 × 30 cm	34.5 cm
P－4	36 × 35 cm	18.4 cm
P－5	37 × 37 cm	3.6 cm
P－6	23 × 25 cm	12.0 cm
P－7	25 × 25 cm	19.0 cm
P－8	77 × 27 cm	6.9 cm
P－9	40 × 35 cm	17.3 cm
P－10	82 × 82 cm	28.9 cm

0 2m

第7図　ＳＩ－０１平面図

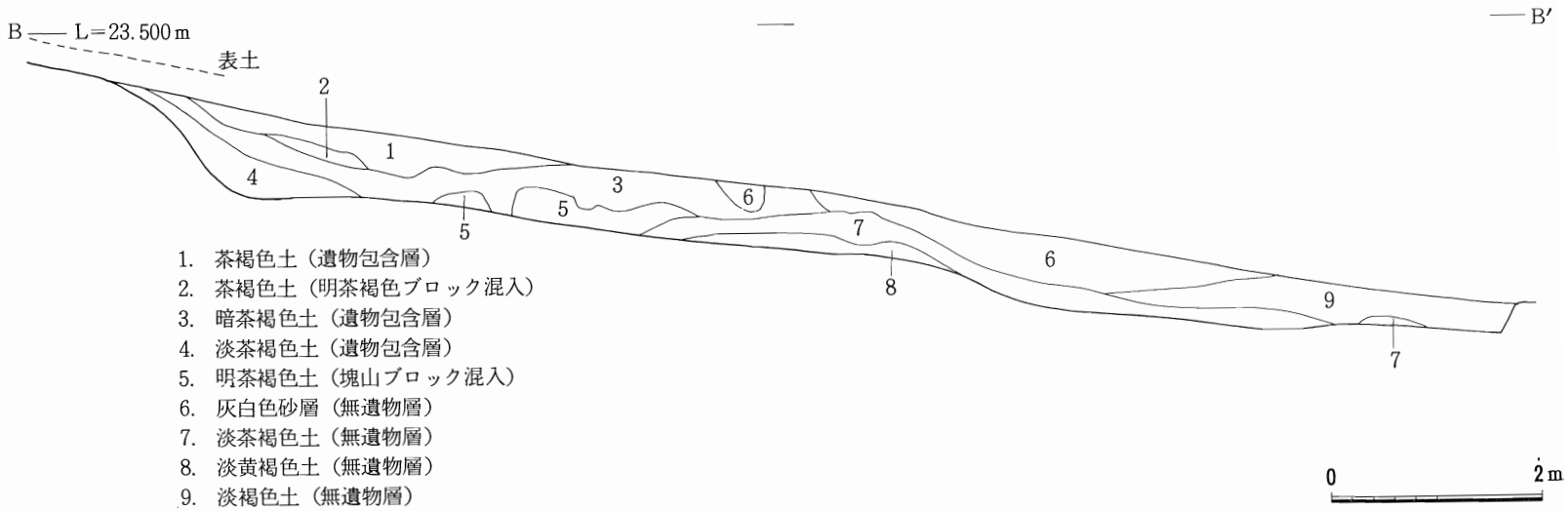


第8図　A－2区、SB－01、SB－02



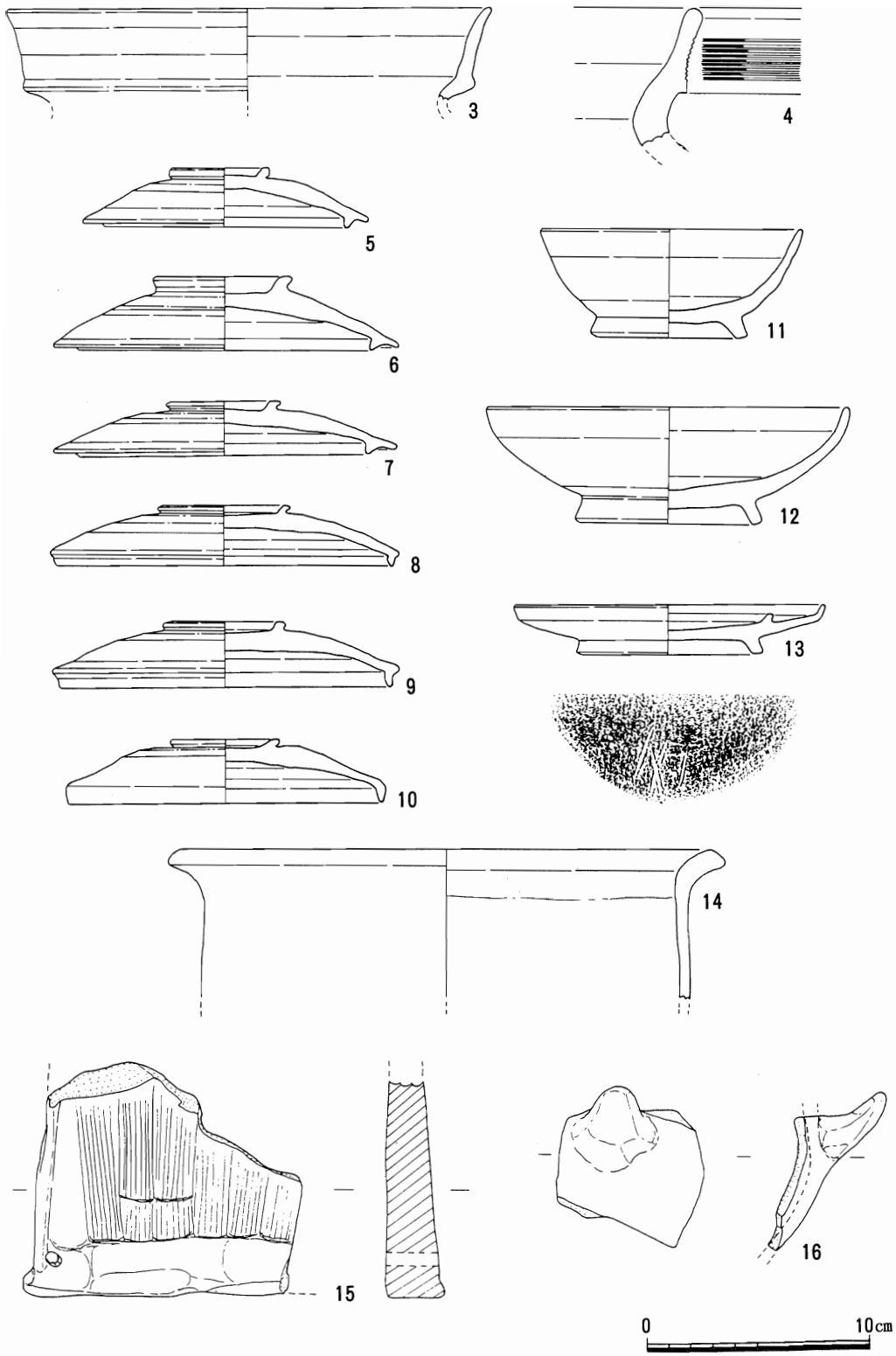
1. 茶褐色土（遺物包含層）
2. 明茶褐色土（遺物包含層）
4. 暗茶褐色土（遺物包含層）
4. 灰白色砂層（無遺物層）
5. 淡茶褐色土（無遺物層）

第９－１図　加工段状遺構セクションＡ－Ａ′

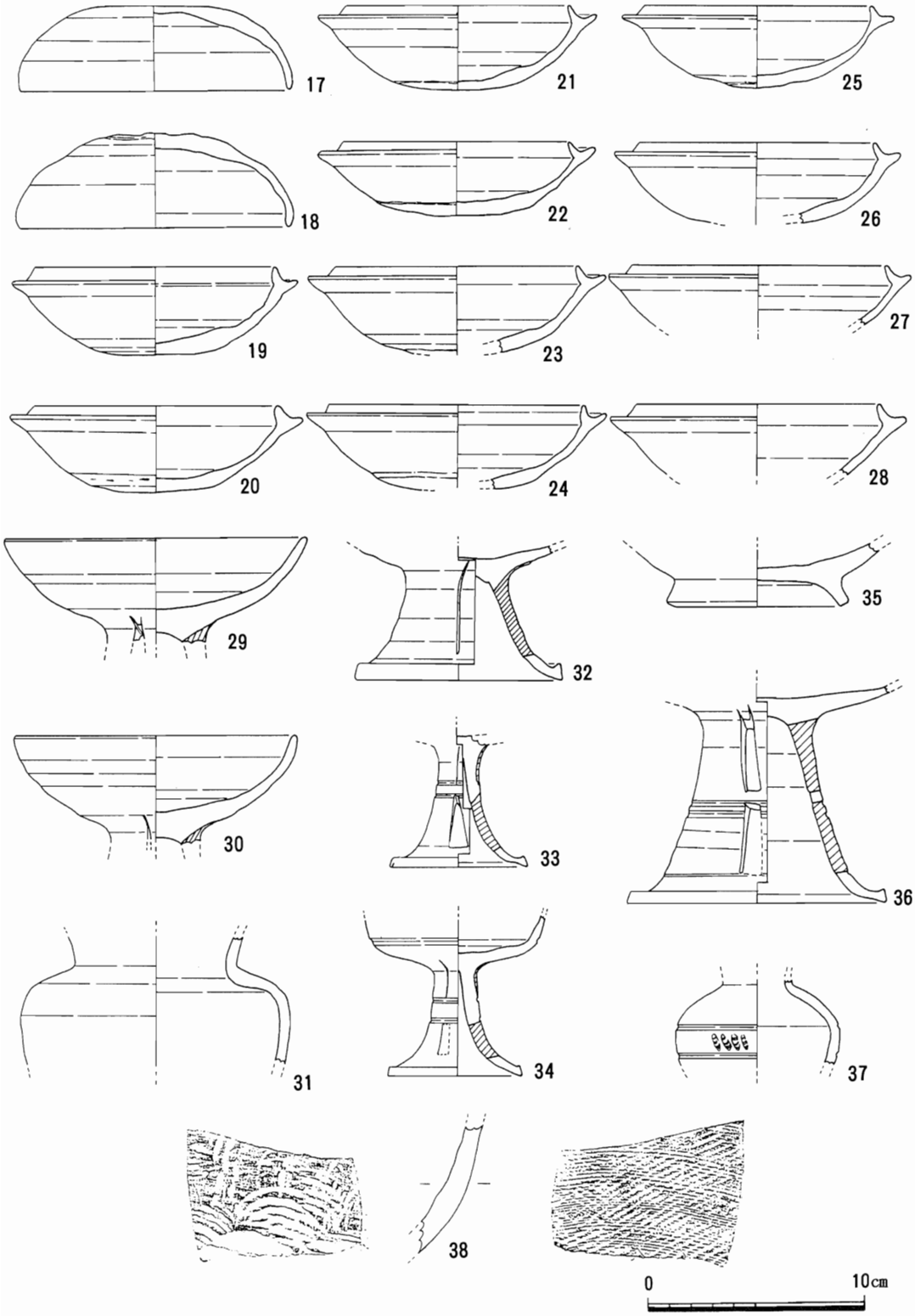


1. 茶褐色土（遺物包含層）
2. 茶褐色土（明茶褐色ブロック混入）
3. 暗茶褐色土（遺物包含層）
4. 淡茶褐色土（遺物包含層）
5. 明茶褐色土（塊山ブロック混入）
6. 灰白色砂層（無遺物層）
7. 淡茶褐色土（無遺物層）
8. 淡黄褐色土（無遺物層）
9. 淡褐色土（無遺物層）

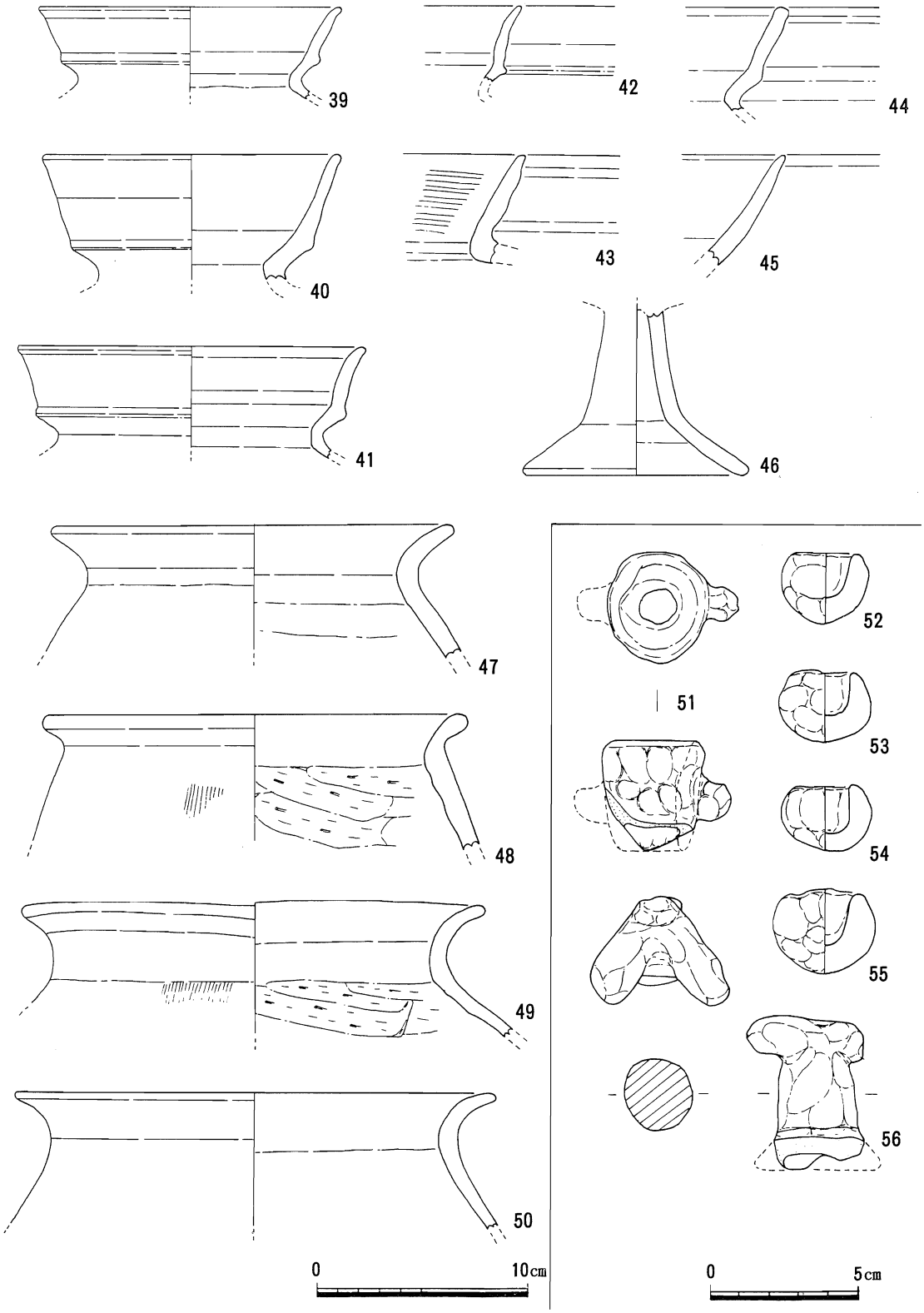
第９－２図　加工段状遺構セクションＢ－Ｂ′



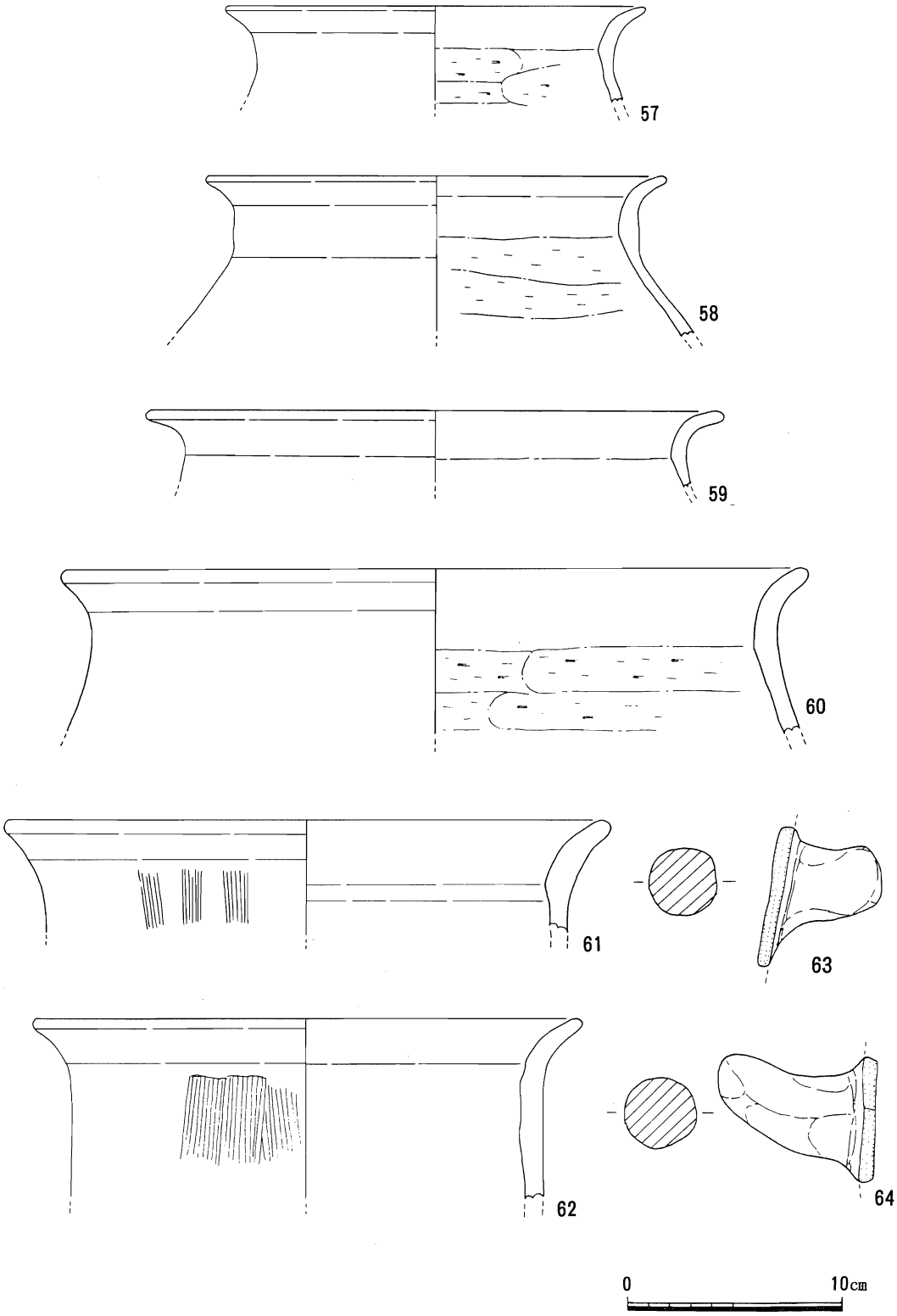
第 10 図　A－3 区加工段下出土遺物



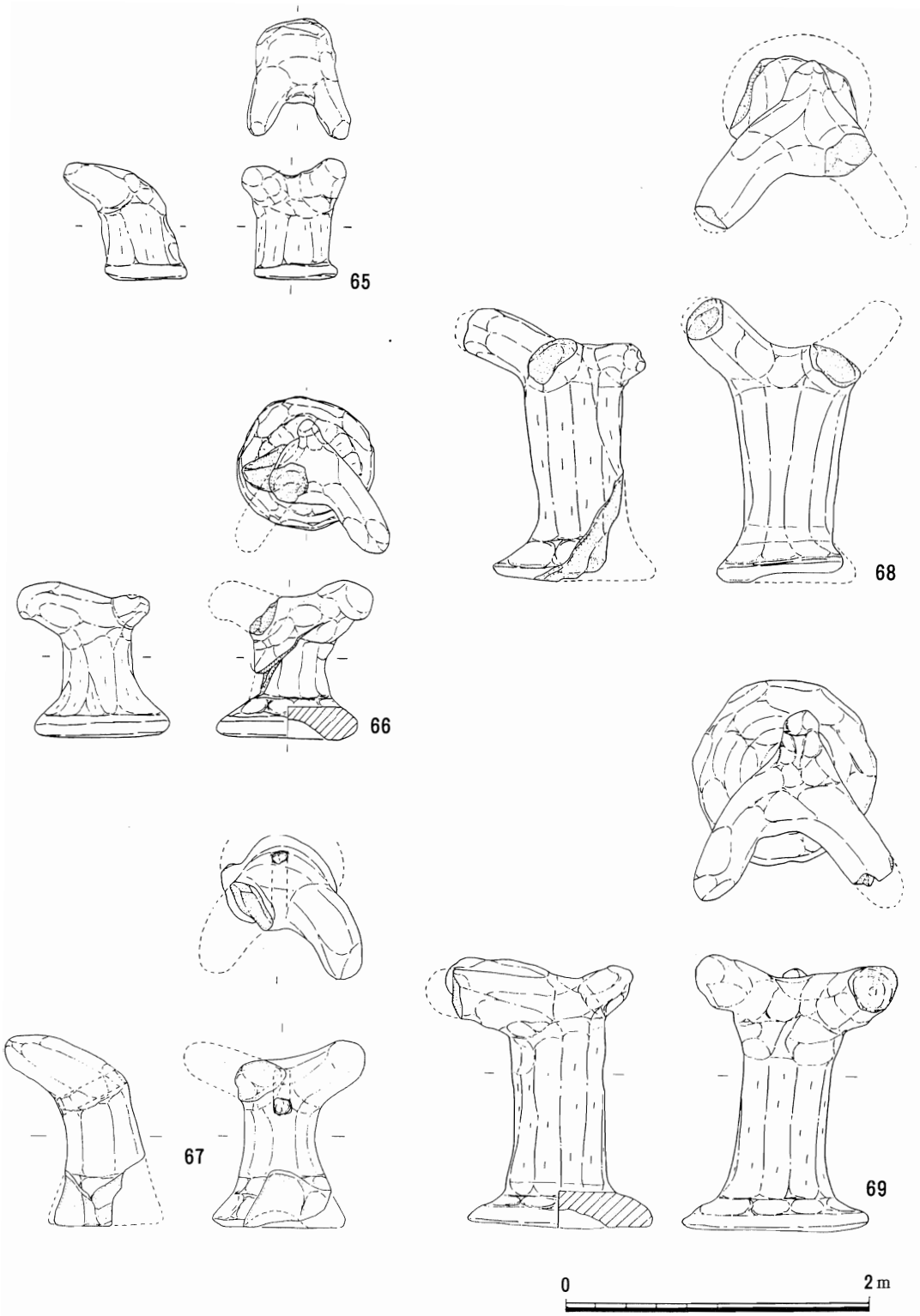
第 11 図　加工段下出土遺物



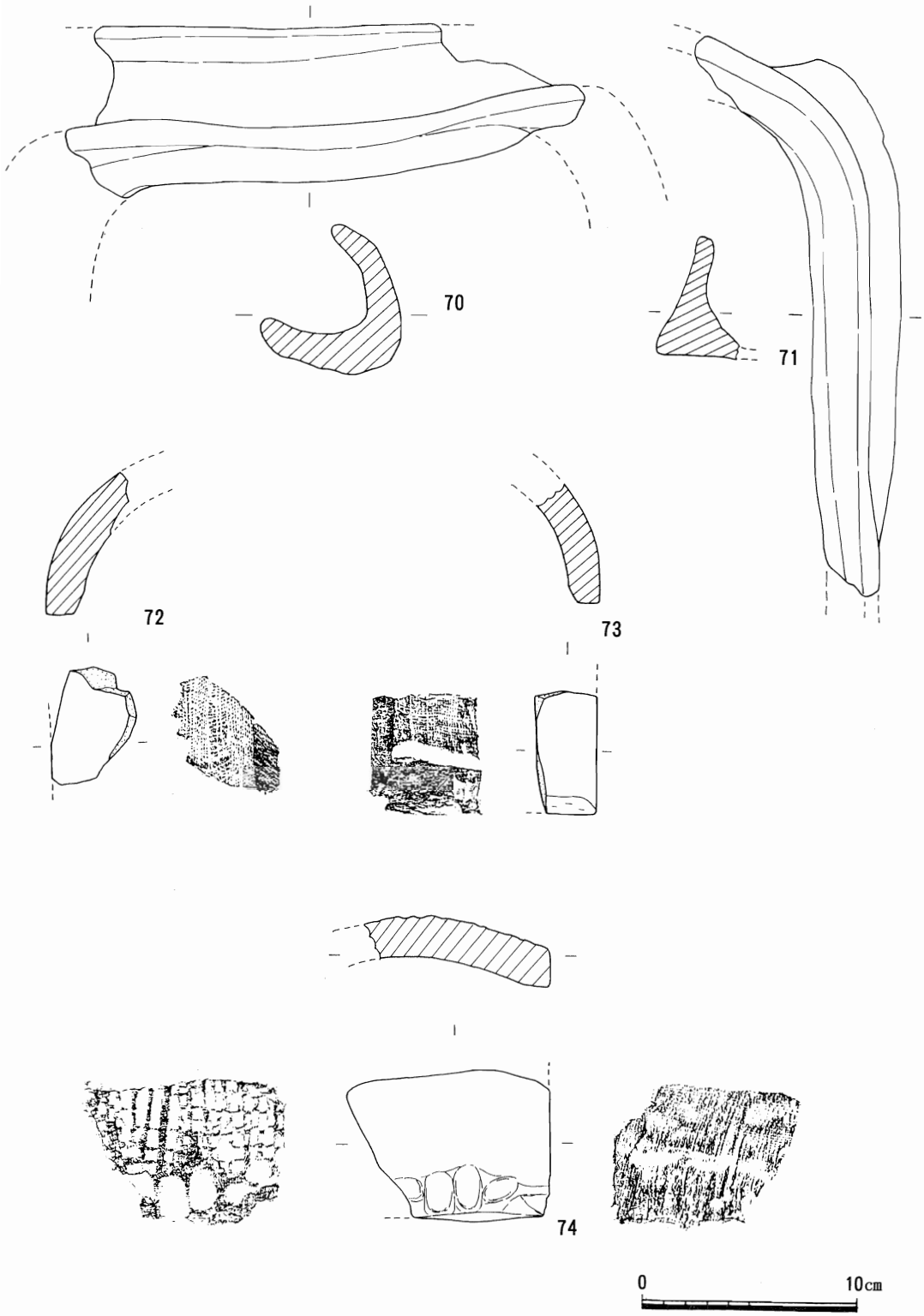
第 12 図　加工段下出土遺物



第 13 図　加工段下出土遺物



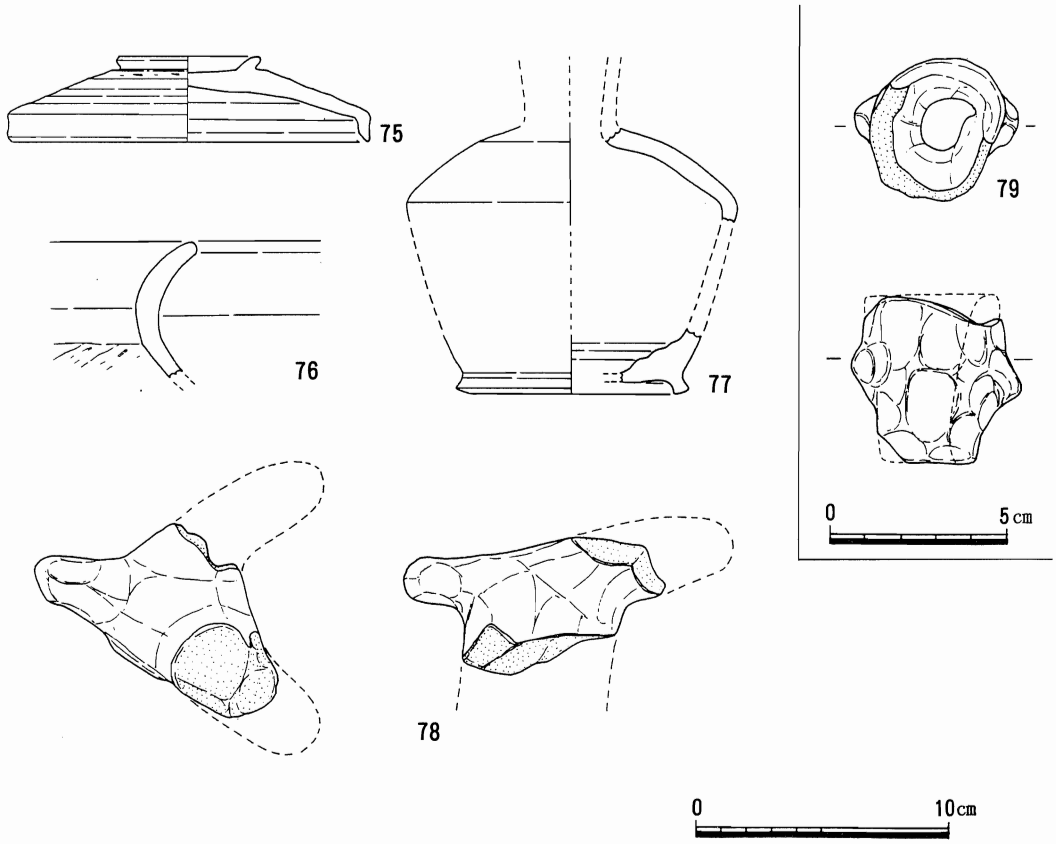
第 14 図　加工段下出土遺物



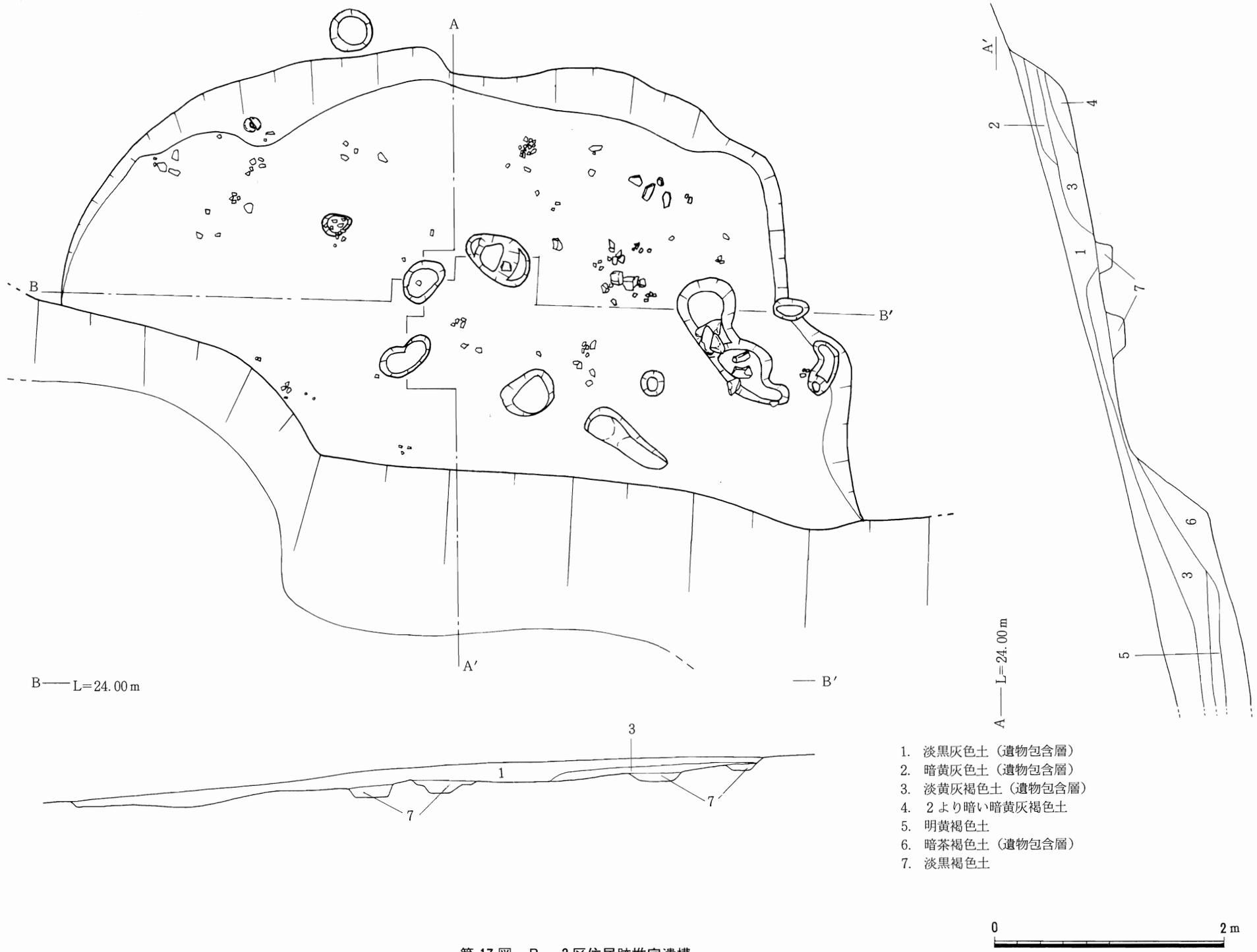
第 15 図　加工段下出土遺物

(5) 住居跡推定遺構

Ｂ－３区の加工段状遺構から斜面上方に向かって隅丸方形に掘り込む形で作られており，南北長7.0m，東西長3.7mを測る。埋土中からは６Ｃ末～７Ｃ末にかけての須恵器蓋坏類，土師器壺甕類，支脚，かまど等，多数の土器片が見られたが，いずれも埋土上層からの流れ込みによるものであると考えられる。床面にはピットが存在するものの，上屋を構築しうるものではなく，住居跡としての利用を想定するには疑問が残る。また，本遺構下の加工段下部では，ミニチュアの支脚（56），甑（51），手づくね土器（52，53，54，55）が検出されており，これらが本遺跡から流出したものであるとすれば，祭祀関係に利用された遺構である可能性も考えられる。



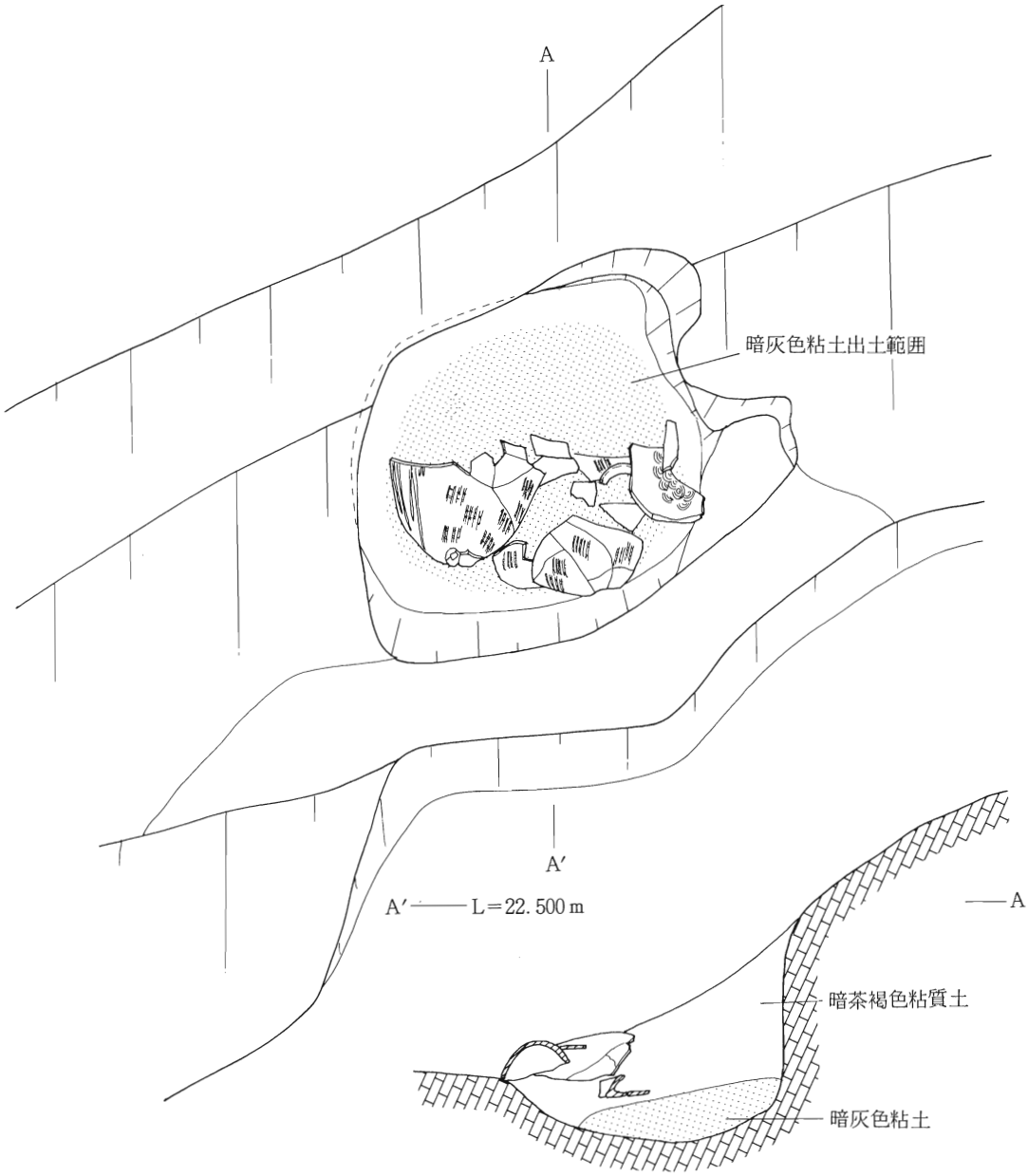
第16図　Ｂ－３区住居跡推定遺構出土遺物



第 17 図　B－3区住居跡推定遺構

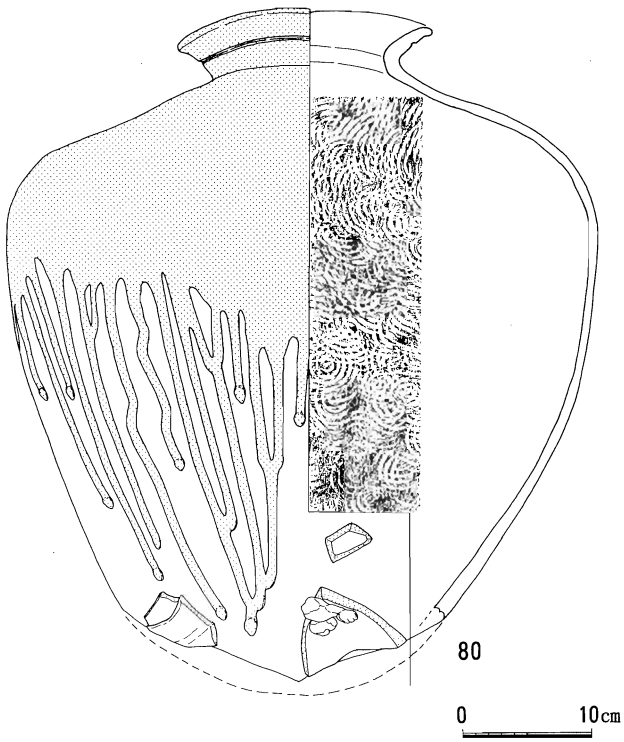
(6) SK－01

A－3区の加工段中腹で検出された土壙である。117cm×90cm，深さ最大55cmを測るやや不整形の土壙であり，須恵器の大甕（80）が1個体納められていた。また，この大甕を取り除いた底部に暗灰色の粘土が厚さ10cmほど堆積していたが，用途は不明である。



第18図　A－3区SK－01遺構図

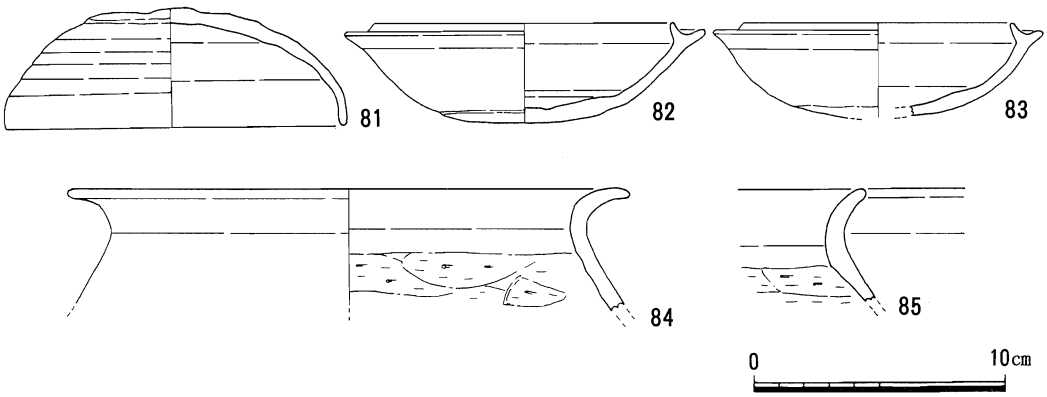
0　1m



第19図　ＳＫ－０１出土大甕

(7)　Ｂ－４～Ｃ－４区ピット群

本遺跡中央部のＢ－４区からＢ－５区にかけて検出されたピット群で，いずれも地山面から掘り込まれているが，不整形なものが多く建物の復元が不可能なものであるが，Ｂ－４区では一部掘り込みの痕跡が残っており，埋土中に６Ｃ末の須恵器坏身（83）と土師器壷甕類（84，85）の細片が多数含まれており，竪穴住居跡の可能性が考えられる。



第20図　Ｂ－４～Ｃ－４区出土遺物

(8)　T－1

B－6区に設定したトレンチで，地山面まで掘り下げた。その結果，暗茶褐色の土層の堆積が認められ，若干の土師器の細片が検出された。

(9)　T－2

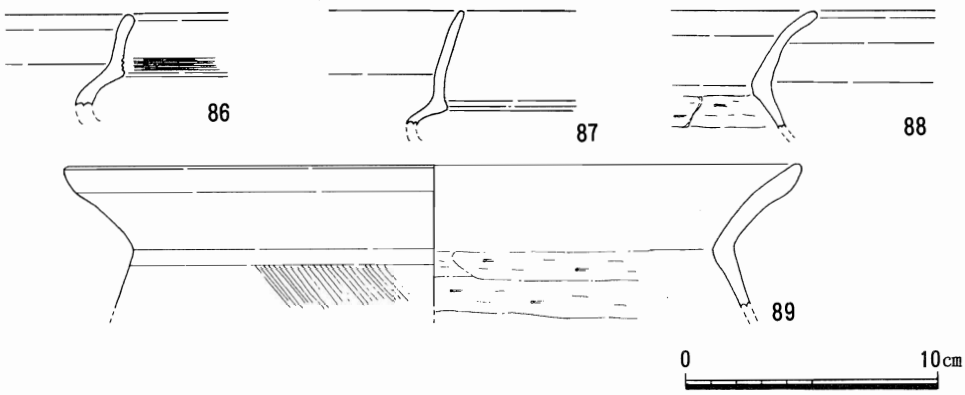
B－6区にT－1と平行する形で設定したトレンチで，地山面まで掘り下げた。その結果，第1層（暗茶褐色土）で若干の土師器の細片が検出され，第2層（黒褐色土）中には遺物は検出されなかった。また，地山面において不整形の掘り込みが検出されたが，遺物は検出されなかった。

(10)　T－3

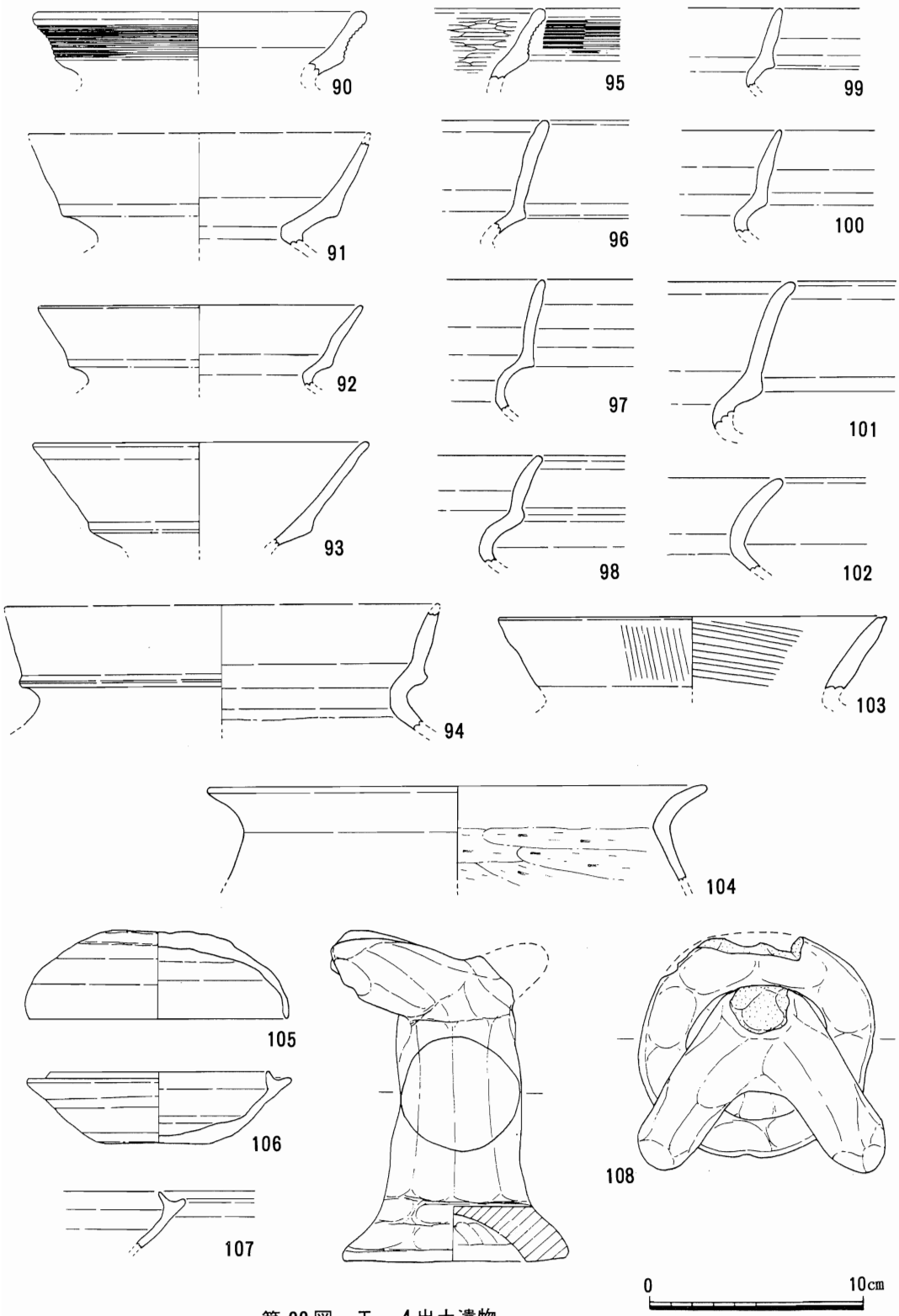
B－6区からB－7区にかけて，T－1，2と直交する形で設定したトレンチで，地山面まで掘り下げた。その結果，第1層（暗茶褐色土）で若干の古式土師器が検出された他，それ以下の土層中では遺物は検出されなかった。また，地山面においてトレンチに直交する形で東西方向に走る溝状の遺構が検出されたが，遺物はなく性格は不明である。

(11)　T－4

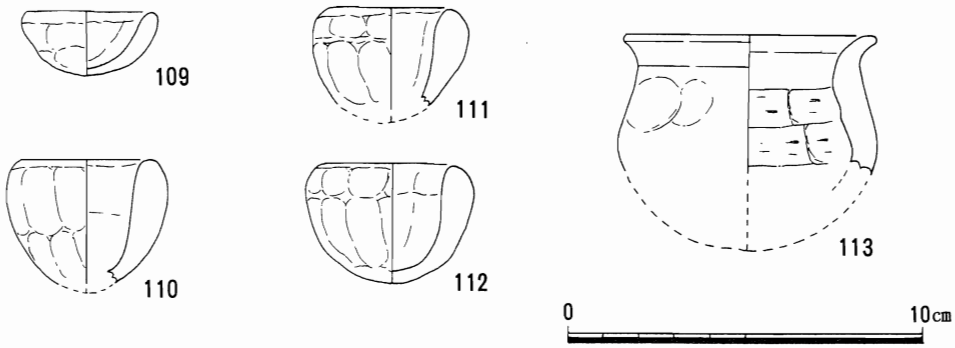
C－5区からD－5区にかけて南北方向に設定したトレンチで，地山面まで掘り下げた。その結果，第1，2層（茶褐色系土層）までは遺物の包含が認められたが，第3，4層では検出されなかった。地山面に遺構はなく，地山面は北方向に向かって下降して行き，北接する間内越の丘陵裾付近でゆるやかに上昇する。第1，2層に含まれる遺物は古式土師器が大半で，それに古墳時代の土師器片が混入しており，これらは北接する間内越遺跡から流入したものと考えられる。



第21図　T－2、3出土遺物


90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
10cm

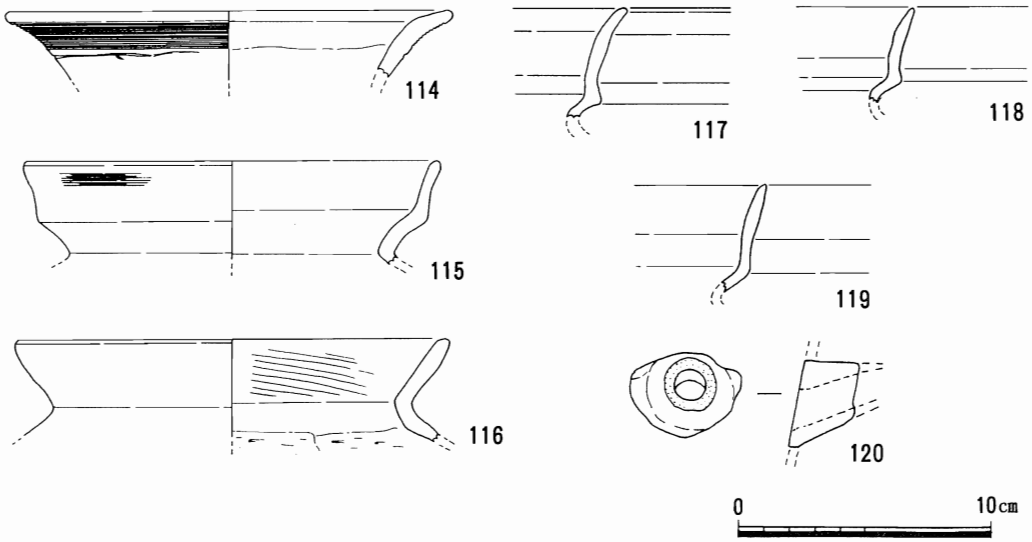
第22図　T－4出土遺物



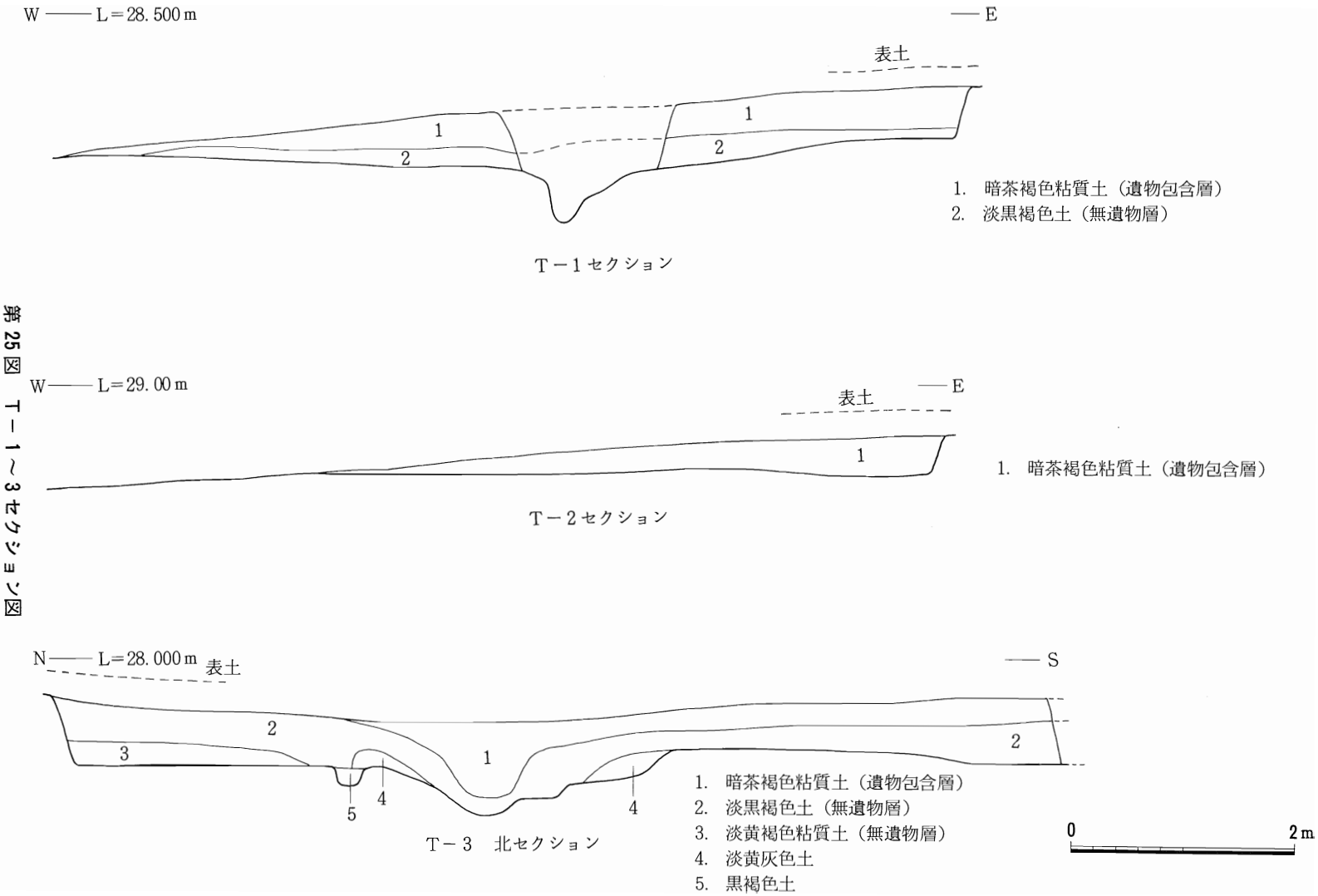
第23図　Ｔ－４出土ミニチュア土器

⑿　Ｔ－５

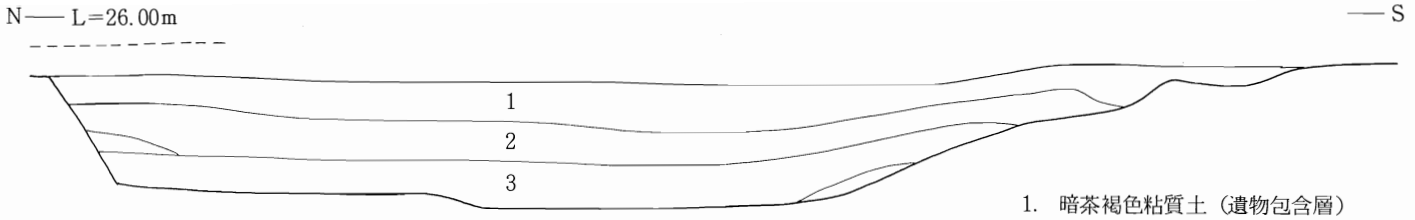
Ｃ－５区からＤ－５区にかけてＴ－４と平行する形で設定したトレンチで，地山面まで掘り下げた。その結果，土層の堆積状況はＴ－４とほぼ同じで，第１，２層に古式土師器を主体とする遺物を包含し，第３層（黒褐色土）は無遺物層である。地山面も同様に北方に向かって下降したのち間内越の丘陵裾付近でゆるやかに上昇する。Ｔ－４，５の調査結果から，かつて本遺跡と間内越の丘陵の間には狭小な谷が入り込んでおり，その谷に本遺跡と間内越遺跡からの遺物が流入しているものと考えられる。



第24図　Ｔ－５出土遺物

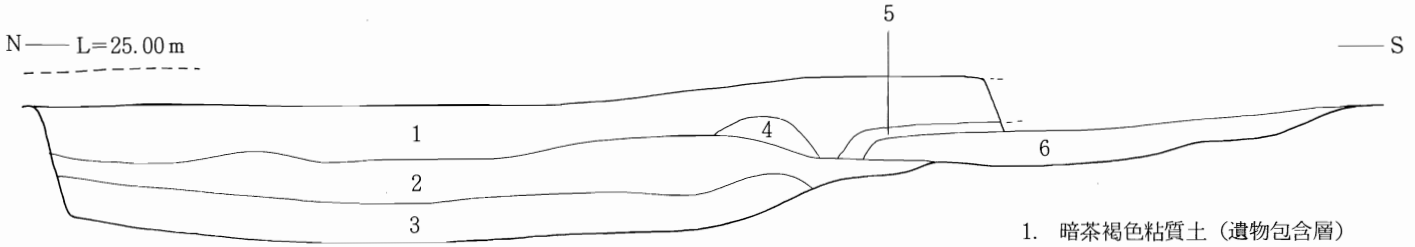


第25図　T－1～3セクション図



T－4セクション

1. 暗茶褐色粘質土（遺物包含層）
2. 淡茶褐色粘質土（遺物包含層）
3. 淡黒褐色土（無遺物層）
4. 淡黒灰色土（無遺物層）



T－5セクション

1. 暗茶褐色粘質土（遺物包含層）
2. 淡茶褐色粘質土（遺物包含層）
3. 淡黒褐色土（無遺物層）
4. 撹　乱
5. 淡黒褐色土
6. 暗黄褐色土

0　2m

第26図　T－4、5セクション図

4．小　　結

調査の結果，本遺跡からはコンテナ20箱分の土器が出土しているが，６Ｃ末～７Ｃ末のものが大半を占める。また，Ｃ－５区～Ｄ－５区を中心とする北側の遺物包含層中には古式土師器の破片が多く含まれているが，これらは隣接する間内越遺跡からの流入によるものであると考えられ，本遺跡の時期を決定するものではないと思われる。器種としては壺甕類，支脚，かまど，甑等があり，いずれも日常的に使われる器種であることから，本遺跡が集落跡であった可能性は非常に高い。実際に住居跡であると確認された遺構は，SI－01，SB－01，02のみであるが，土器の出土量から考えると，更に多数の住居跡が存在していたことが考えられ，それらは加工段より上方に推定される。すなわち，本来なだらかな緩斜面を利用して集落を形成していたものの，後世になんらかの目的で削平され，西側加工段より下方と北側の間内越の丘陵との間の谷部へ土砂を埋め立て，整地した際に遺構は消滅し，遺物は加工段下と北側谷部分に押し出されて土器溜り状となったものと考えられる。

矢田平所遺跡出土遺物観察表

No.	器　種	法　量　（単位cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
1	高坏脚部	口径 ―― 底径 10.4	脚裾部で屈曲してハ字に開く	外面ハケ目、内面一部ハケ目	SI-01床面出土
2	椀	口径 11.0 器高 ――	ゆるやかに湾曲して端部に至る	内外面ヨコナデ	SI-01床面出土
3	甕口縁部	口径 22.0 器高 ――	二重口縁	内外面ヨコナデ	外面に煤付着
4	甕口縁部	口径 ―― 器高 ――	二重口縁	外面に9条の沈線	
5	坏　蓋	口径 11.1 器高 2.75	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
6	坏　蓋	口径 13.4 器高 2.45	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
7	坏　蓋	口径 13.3 器高 2.6	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
8	坏　蓋	口径 15.4 器高 2.8	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
9	坏　蓋	口径 15.2 器高 3.1	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ	
10	坏　蓋	口径 14.4 器高 3.0	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
11	高台付坏	口径 11.9 器高 2.75	ゆるやかに湾曲して端部に至る	回転ナデ、仕上げナデ	
12	高台付坏	口径 16.5 器高 7.8	ゆるやかに湾曲して端部に至る	回転ナデ、仕上げナデ	
13	円面硯	口径 14.0 器高 2.3		回転ナデ、仕上げナデ	底部外面ヘラ記号
14	甑	口径 24.4 器高 ――			
15	竈	口径 ―― 器高 ――		外面ハケ目、内面ヘラケズリ	下部に穿孔あり
16	羽　釜	口径 ―― 器高 ――	短い把手を付ける	内外面ナデ	外面に煤付着
17	坏　蓋	口径 12.9 器高 4.1	ゆるやかに湾曲して端部に至る	調整不明	
18	坏　蓋	口径 12.6 器高 4.5	ゆるやかに湾曲して端部に至る	天井部ヘラ切り後ナデ	
19	坏　身	口径 11.4 器高 4.2	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
20	坏　身	口径 11.5 器高 4.2	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ヘラナデ	
21	坏　身	口径 10.6 器高 4.1	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
22	坏　身	口径 10.7 器高 3.6	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
23	坏　身	口径 11.4 器高 ――	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
24	坏　身	口径 12.0 器高 4.0	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
25	坏　身	口径 10.6 器高 3.9	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
26	坏　身	口径 11.0 器高 ――	立ち上がりは短く内傾する	内外面回転ナデ	
27	坏　身	口径 12.0 器高 ――	立ち上がりは短く内傾する	内外面回転ナデ	
28	坏　身	口径 11.4 器高 ――	立ち上がりは短く内傾する	内外面回転ナデ	
29	高坏坏部	口径 14.3 器高 ――	ゆるやかに湾曲して端部に至る	内外面回転ナデ	2方向に透かしあり
30	高坏坏部	口径 13.3 器高 ――	ゆるやかに湾曲して端部に至る	内外面回転ナデ	2方向に透かしあり
31	広口壺	口径 ―― 器高 ――		内外面回転ナデ	
32	高坏脚部	底径 9.8 器高 ――	ゆるやかにハ字状に開く	内外面回転ナデ	2方向に透かしあり
33	高坏脚部	底径 6.5 器高 ――	ゆるやかにハ字状に開く	内外面回転ナデ	2方向2段透かし
34	高坏脚部	底径 6.4 器高 ――	ゆるやかにハ字状に開く	内外面回転ナデ	2方向2段透かし
35	高台部片	底径 7.8 器高 ――	高台部はやや開く	内面仕上げナデ、外面回転ナデ	器種不明
36	高坏脚部	底径 12.2 器高 ――	ゆるやかにハ字状に開く	内外面回転ナデ	2方向2段透かし
37	はそう	口径 ―― 器高 ――	胴部は丸い	胴部外面に刺突文	
38	甕　片	口径 ―― 器高 ――		格子状タタキ、同心円状当て具痕	
39	甕口縁部	口径 14.4 器高 ――	二重口縁	内外面ヨコナデ	
40	甕口縁部	口径 14.4 器高 ――	二重口縁	内外面ヨコナデ	
41	甕口縁部	口径 16.2 器高 ――	二重口縁	内外面ヨコナデ	外面に煤付着

No.	器　種	法　量　（単位cm）		形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
42	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
43	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
44	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内面ハケ目、外面ヨコナデ	
45	高坏坏部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ	内面赤色塗彩
46	高坏脚部	底径 10.6	器高 ——	脚裾部で屈曲してハ字に開く	調整不明	外面赤色塗彩
47	甕口縁部	口径 18.8	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
48	甕口縁部	口径 19.7	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
49	甕口縁部	口径 21.8	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
50	甕口縁部	口径 23.0	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面不明	
51	甑　形	口径 2.8	器高 3.8	把手を2方向に付ける	指頭圧痕	ミニチュア土器
52	椀　形	口径 1.7	器高 2.4		指頭圧痕	ミニチュア土器
53	椀　形	口径 1.6	器高 2.5		指頭圧痕	ミニチュア土器
54	椀　形	口径 1.6	器高 2.2		指頭圧痕	ミニチュア土器
55	椀　形	口径 1.7	器高 2.9		指頭圧痕	ミニチュア土器
56	支脚形	胴径 2.4	器高 5.3	3方向に突起を付ける	指頭圧痕	ミニチュア土器
57	甕口縁部	口径 19.8	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
58	甕口縁部	口径 21.5	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
59	甕口縁部	口径 27.2	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ	
60	甕口縁部	口径 35.0	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
61	甑	口径 27.8	器高 ——		胴部外面縦方向ハケ目、内面不明	
62	甑	口径 25.5	器高 ——		胴部外面縦方向ハケ目、内面不明	
63	甑把手	口径 ——	器高 ——		指頭圧痕	
64	甑把手	口径 ——	器高 ——		指頭圧痕	
65	土製支脚	底径 5.6	器高 8.2	2方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	
66	土製支脚	底径 9.3	器高 10.7	3方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	
67	土製支脚	底径 ——	器高 12.7	2方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	胴部に穿孔あり
68	土製支脚	底径 ——	器高 19.0	3方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	
69	土製支脚	底径 12.4	器高 18.5	3方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	
70	かまど	口径 ——	器高 ——		指頭圧痕	
71	かまど	口径 ——	器高 ——		指頭圧痕	
72	丸　瓦	厚さ 1.8			内面に布目痕跡が残る	
73	丸　瓦	厚さ 1.8			内面に布目痕跡が残る	
74	丸　瓦	厚さ 1.8			外面タタキ、内面布目痕、指頭痕	
75	坏　蓋	口径 14.4	器高 3.5	天井部に輪状つまみを付ける	回転ヘラケズリ、回転ナデ	
76	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
77	長頸壺	底径 8.4	器高 ——	肩部はやや張る	回転ナデ	
78	土製支脚	底径 ——	器高 ——	3方向に突起を付ける	指頭圧痕	
79	甑　形	口径 3.8	器高 4.8	把手を2方向に付ける	指頭圧痕	ミニチュア土器
80	甕	口径 20.0	器高 ——	口縁は大きく開き、肩部は張る	外面格子状タタキ、内面同心円文	自然釉がかかる
81	坏　蓋	口径 13.6	器高 4.9	ゆるやかに湾曲して端部に至る	天井部ヘラ切り後ナデ	
82	坏　身	口径 12.0	器高 4.1	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
83	坏　身	口径 10.8	器高 3.9	立ち上がりは短く内傾する	内外面回転ナデ	
84	甕口縁部	口径 22.4	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	

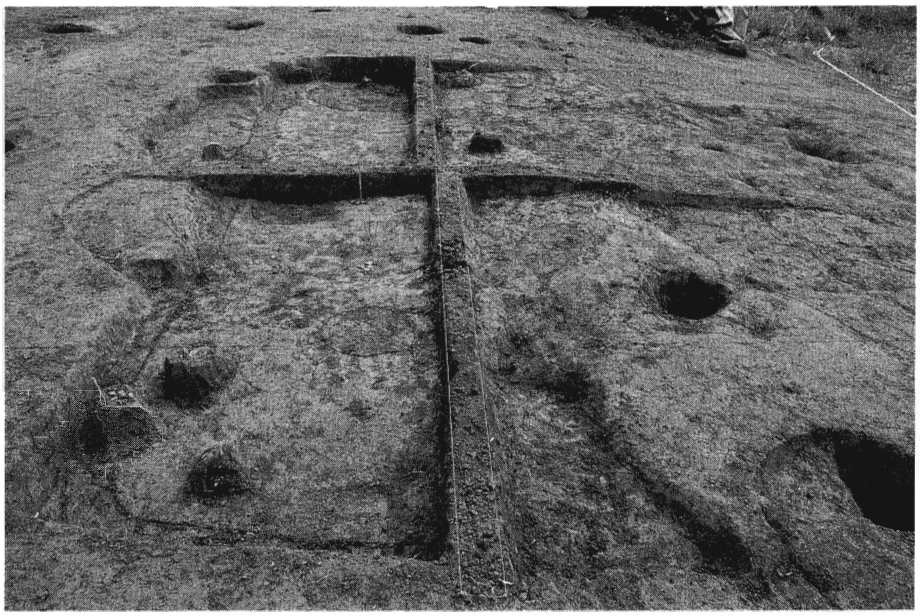
No.	器　種	法　量　（単位cm）		形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考
85	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
86	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	外面に3条の沈線が残る	
87	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
88	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	外面に煤付着
89	甕口縁部	口径 29.3	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	胴部外面タテハケ
90	甕口縁部	口径 15.4	器高 ——	二重口縁	外面に9条の沈線を施す	
91	甕口縁部	口径 16.0	器高 ——	二重口縁	調整不明	
92	甕口縁部	口径 15.2	器高 ——	二重口縁	調整不明	
93	甕口縁部	口径 16.0	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
94	甕口縁部	口径 20.8	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
95	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	外面9条の沈線、内面ミガキ	
96	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
97	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
98	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
99	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
100	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	調整不明	
101	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
102	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ	
103	甕口縁部	口径 18.6	器高 ——	単純口縁	外面タテハケ、内面ヨコハケ	
104	甕口縁部	口径 23.4	器高 ——	単純口縁	内外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ	
105	坏　蓋	口径 12.4	器高 4.9	ゆるやかに湾曲して端部に至る	天井部ヘラ切り後ナデ	
106	坏　身	口径 10.4	器高 3.6	立ち上がりは短く内傾する	底部ヘラ切り後ナデ	
107	坏　身	口径 ——	器高 ——	立ち上がりは短く内傾する	内外面回転ナデ	
108	土製支脚	底径 10.9	器高 16.0	3方向に突起を付ける	指頭圧痕、ヘラケズリ	
109	椀　形	口径 3.8	器高 1.8		指頭圧痕	
110	椀　形	口径 3.8	器高 3.5		指頭圧痕	
111	椀　形	口径 3.1	器高 3.0		指頭圧痕	
112	椀　形	口径 3.4	器高 3.5		指頭圧痕	
113	甕　形	口径 7.0	器高 ——	口縁部は外反する	外面指頭圧痕、内面ヘラケズリ	
114	———	口径 17.5	器高 ——	口縁は大きく外反する	外面に11条の沈線を施す	
115	甕口縁部	口径 16.6	器高 ——	二重口縁	外面に3条の沈線が残る	
116	甕口縁部	口径 17.3	器高 ——	単純口縁	外面ヨコナデ、内面ヨコハケ	
117	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
118	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
119	甕口縁部	口径 ——	器高 ——	二重口縁	内外面ヨコナデ	
120	注口土器	——	——	径13㎜の筒状を呈する		

図　　版

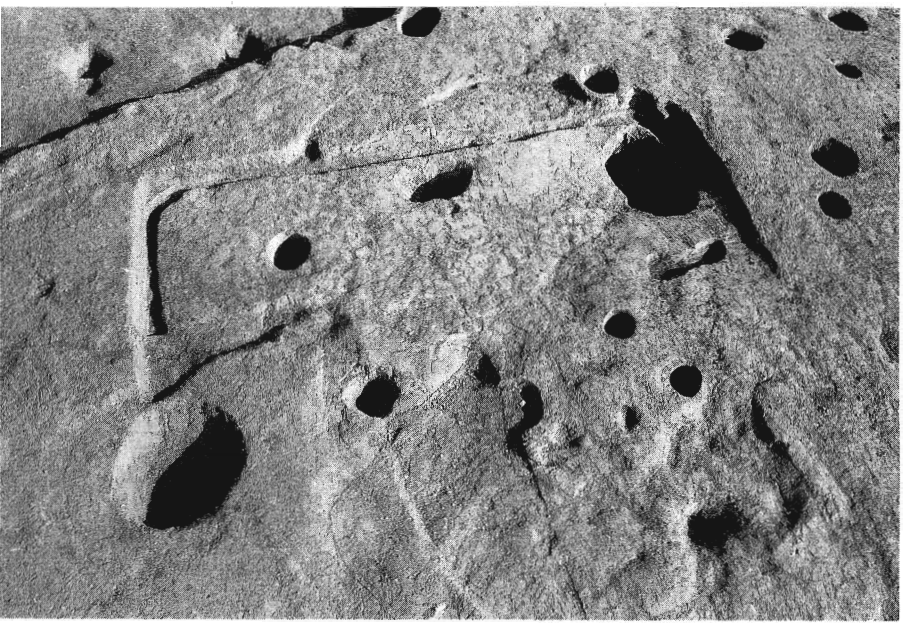
PL－1

1. 矢田平所遺跡
調査前近景（西方から）

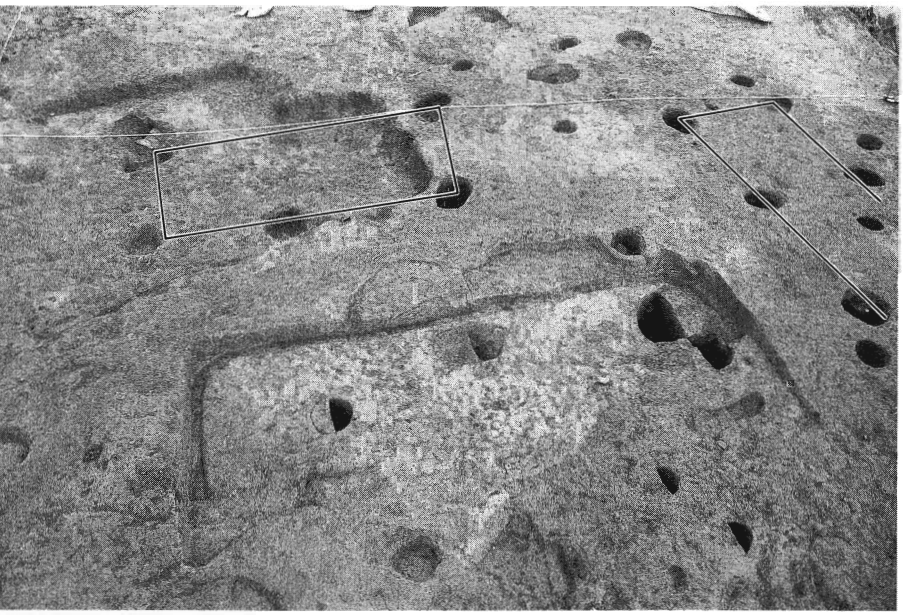
SI－01
2. 遺物出土状況
（北方から）



SI－01
3. 高坏出土状況
（西方から）



4. ＳＩ－０１完掘状況
（西方から）



5. ＳＢ－０１、０２
（手前はＳＩ－０１）
（西方から）

6. 住居跡推定遺構
遺物出土状況
（西方から）

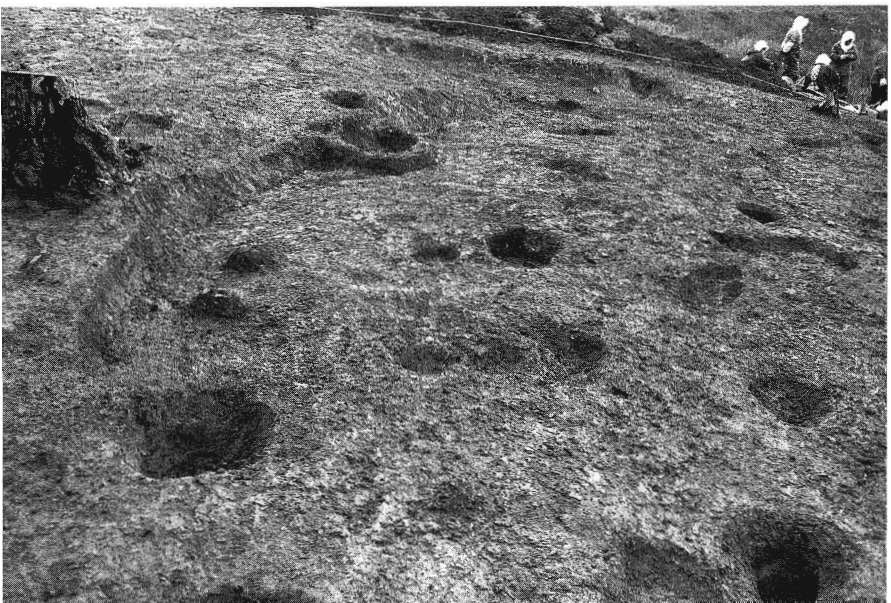
7. 加工段状遺構
遺物出土状況
（北方から）

8. 加工段状遺構完掘状況
（北方から）

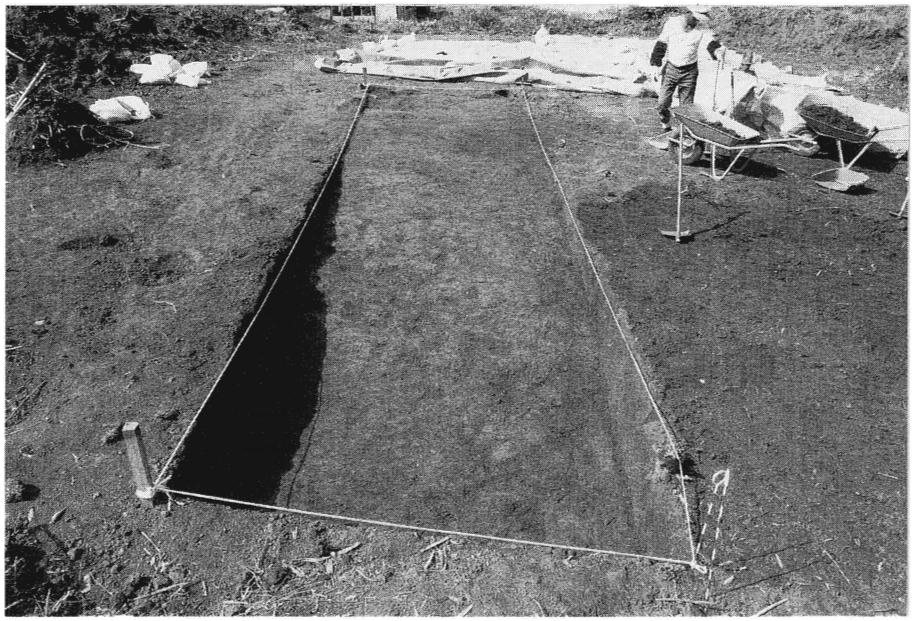
9. 加工段状遺構完掘状況
（南方から）

ＳＫ－０１
10. 大甕出土状況
（西方から）

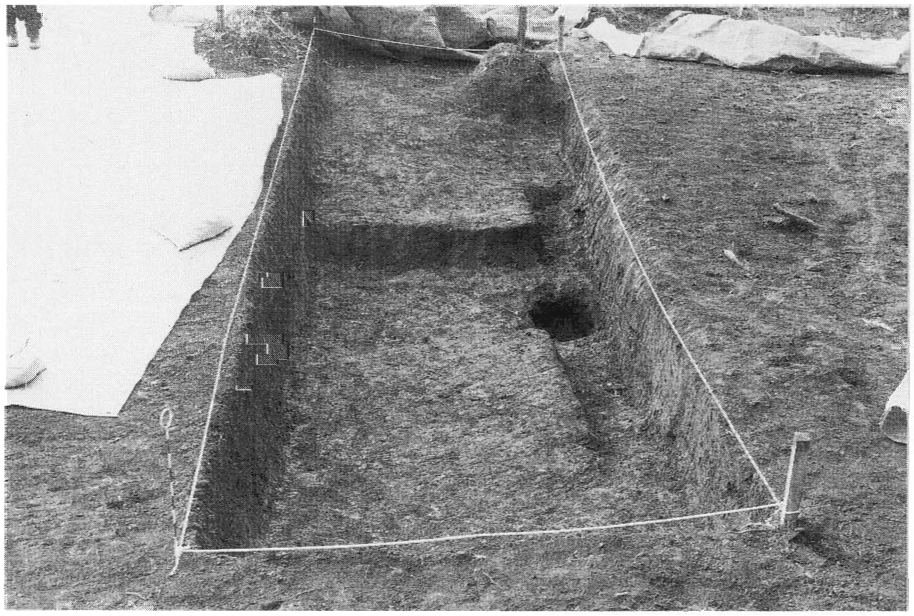
ＳＫ－０１
11. 暗灰色粘土堆積状況
（南西方向から）



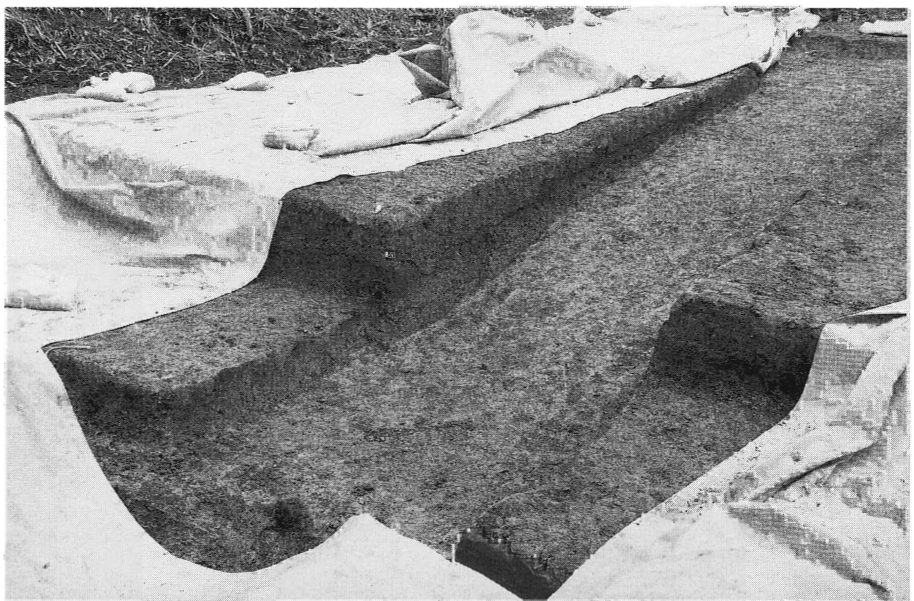
Ｂ－４区ピット群
12. （住居跡か？）
（北方から）



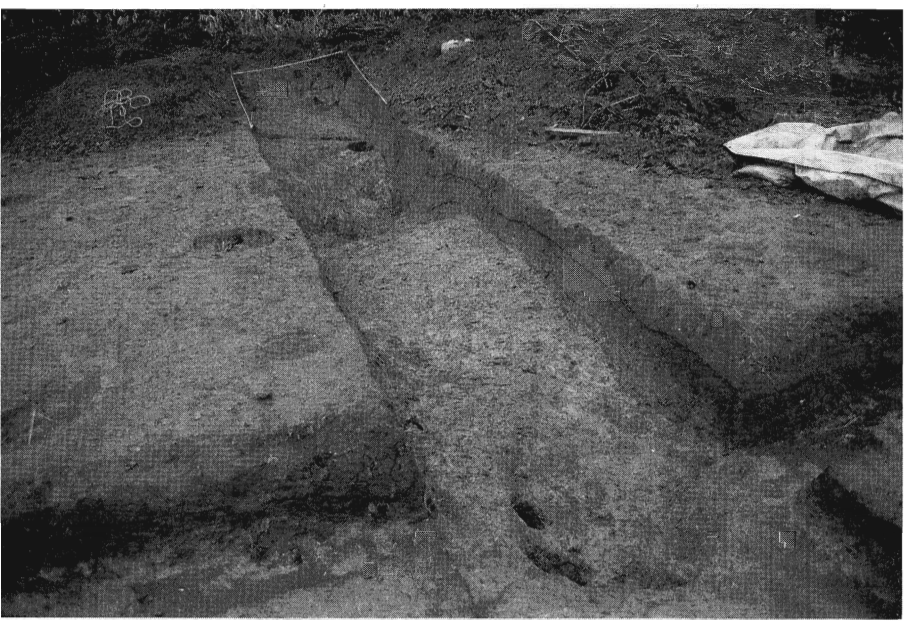
13. Ｔ－１完掘状況
（東方から）



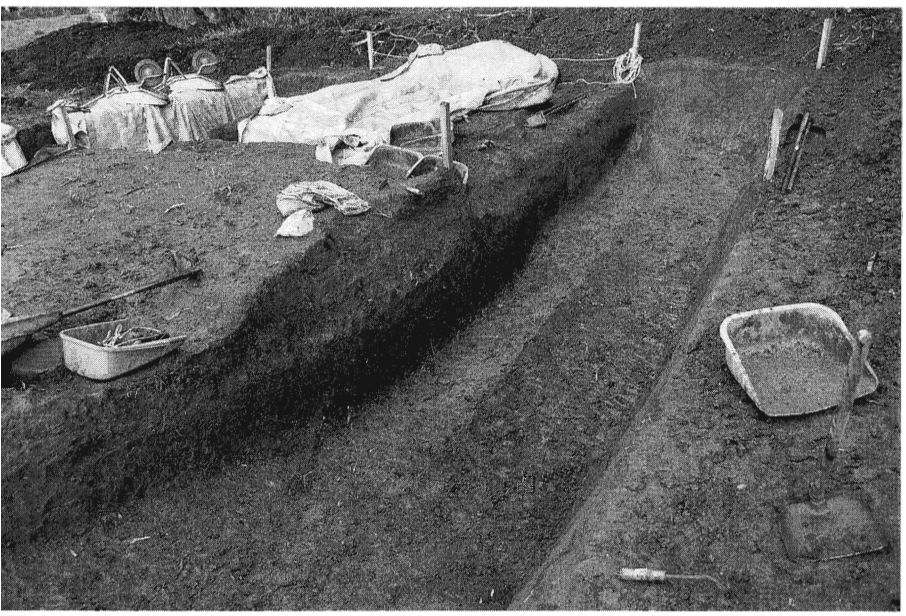
14. Ｔ－２完掘状況
（東方から）



15. Ｔ－３南区完掘状況
（北西方向から）



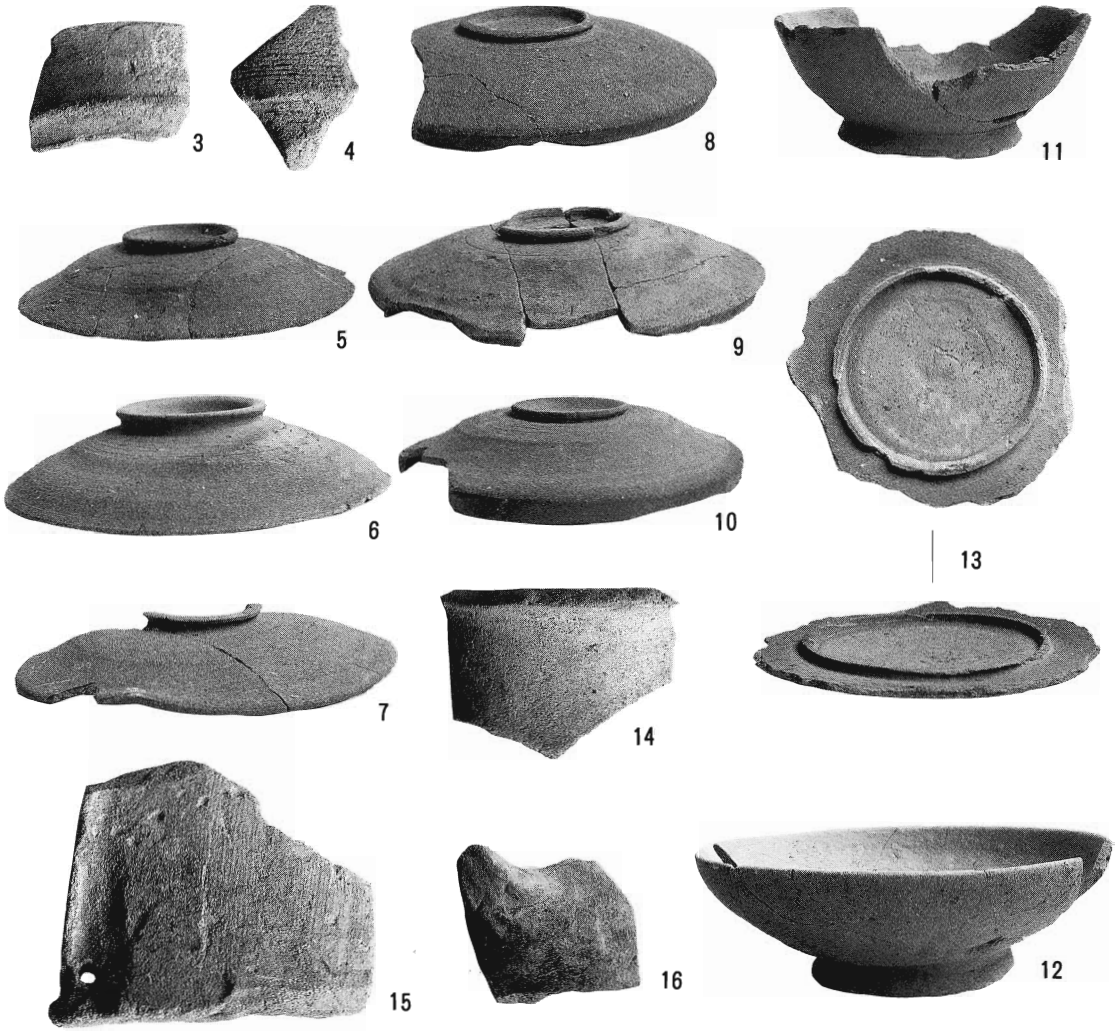
16. Ｔ－３北区完掘状況
（南方から）



17. Ｔ－４完掘状況
（南方から）

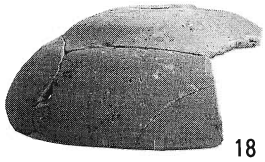
18. Ｔ－５完掘状況
（南方から）

ＳＩ－０１出土遺物



Ａ－３区加工段状遺構出土遺物

17


18

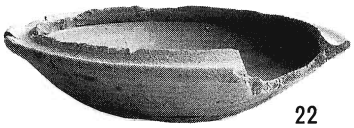
19

20

32

36

21

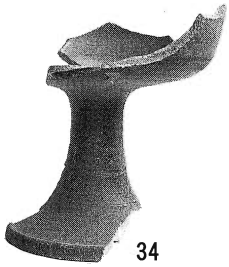

22

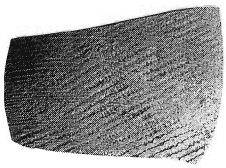
23

24

25

33

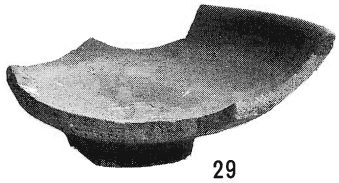

34


38

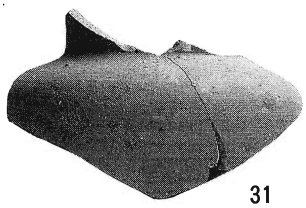
26

27

28


29

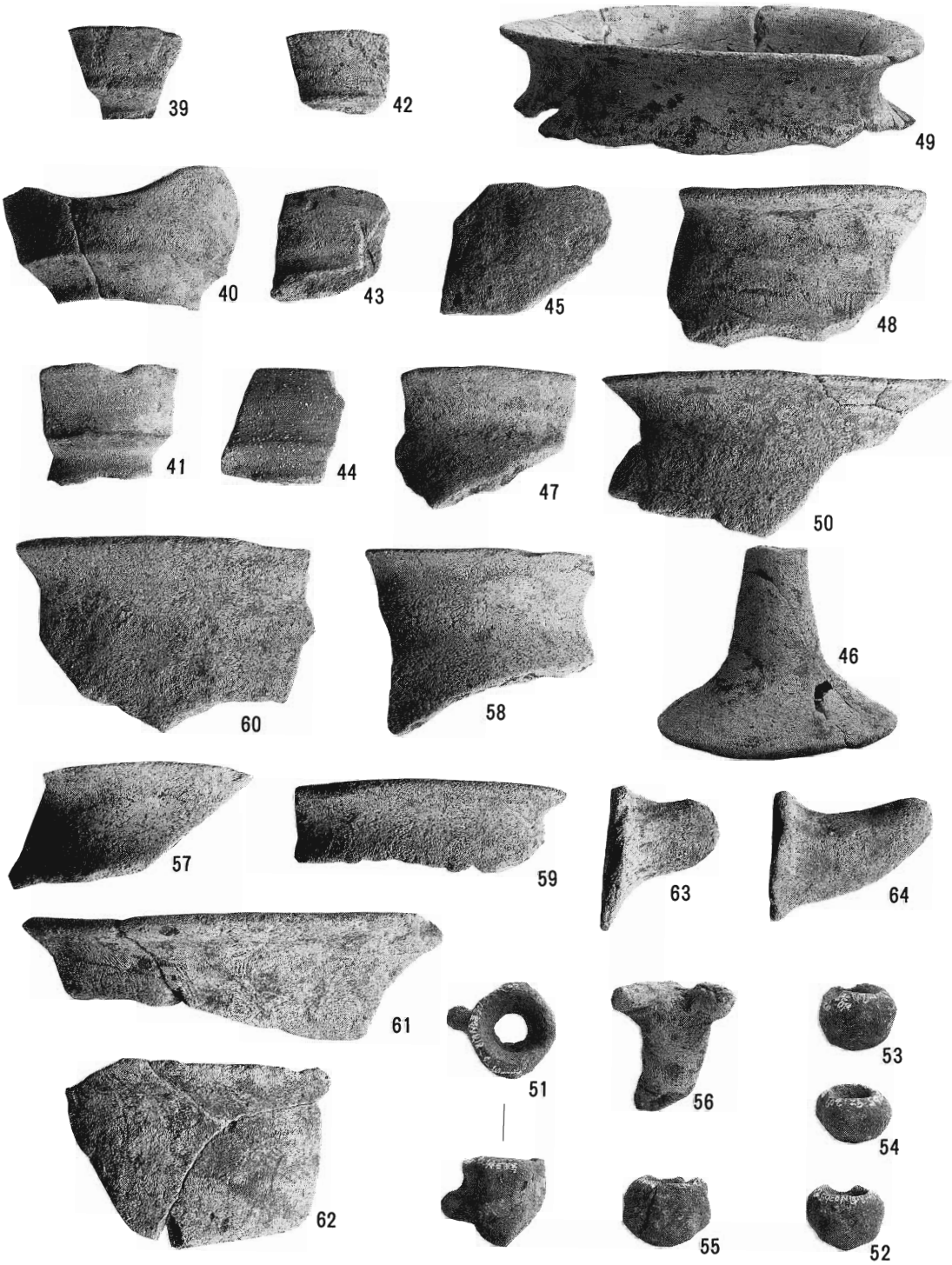
30


31

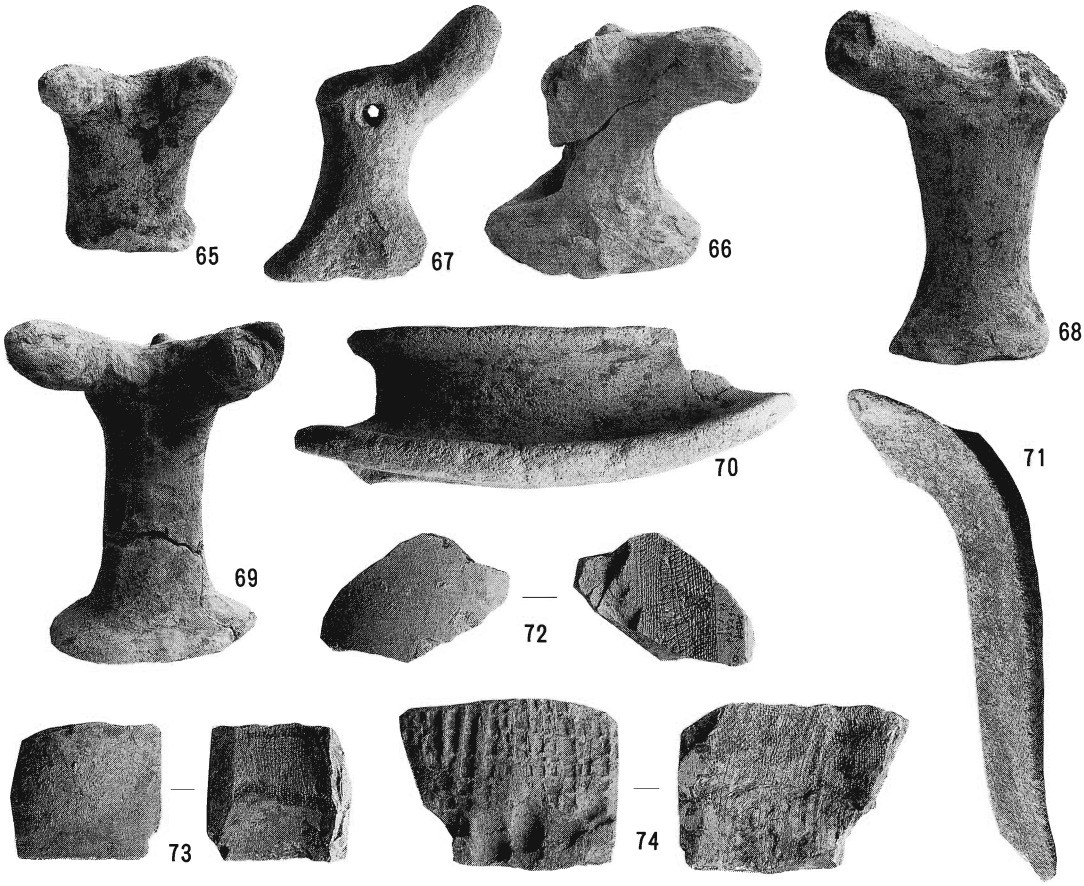
37

35

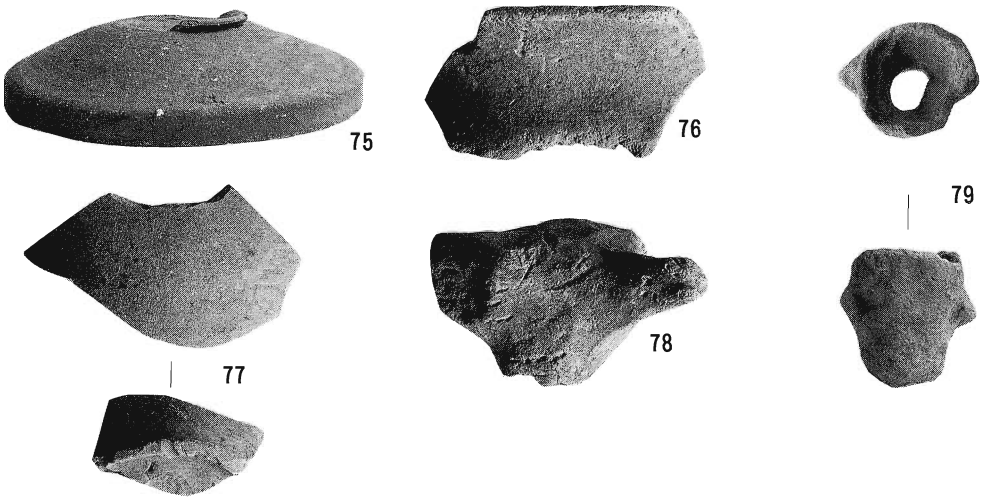
加工段状遺構出土遺物


39
42
49
40
43
45
48
41
44
47
50
60
58
46
57
59
63
64
61
51
56
53
54
62
55
52

加工段状遺構出土遺物

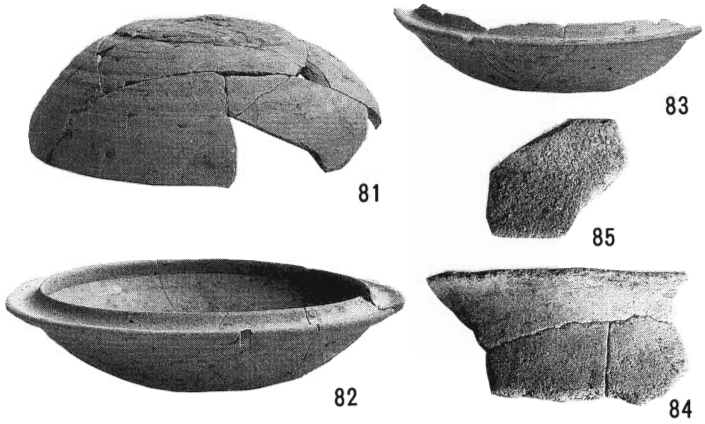


加工段状遺構出土遺物

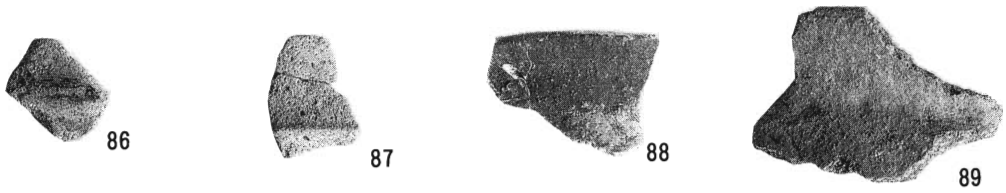


住居跡推定遺構出土遺物

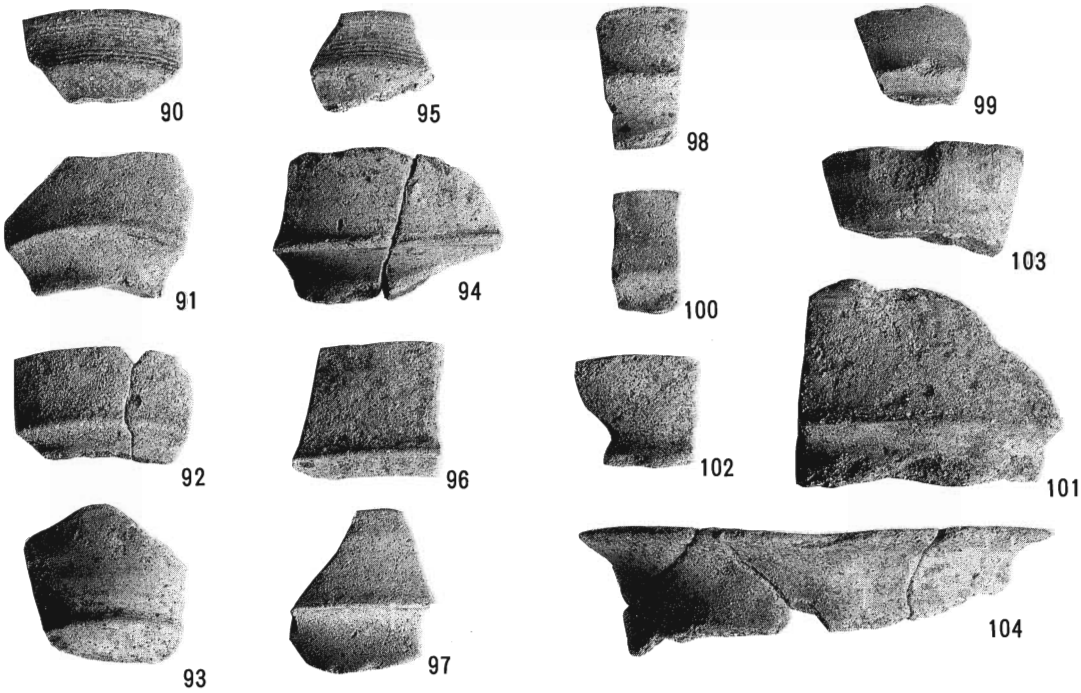
ＳＫ－０１出土大甕



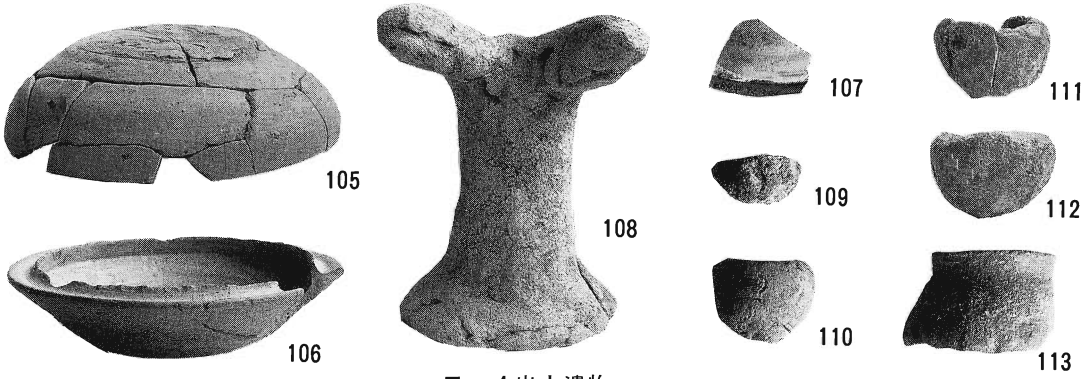
Ｂ－４～Ｃ－４区出土遺物



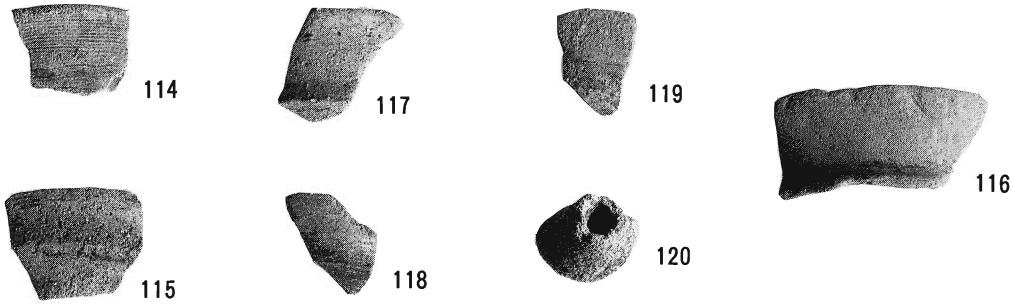
Ｔ－２・３出土遺物



Ｔ－４出土遺物



Ｔ－４出土遺物



Ｔ－５出土遺物

矢田平所遺跡発掘調査報告書
報　告　書

1993年3月

発　行　　松江市教育委員会

印　刷　　有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89